

---

# 遊戯王 ～プラネットシリーズと共に～

朱雀

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

遊戯王 ～プラネットシリーズと共に～

### 【Nコード】

N4844Z

### 【作者名】

朱雀

### 【あらすじ】

引越した友人から貰った謎のカード、The suprema cy SUN。ひょんなことから、プラネットシリーズを集めることになった主人公 佐藤達也はどのような運命を辿るのだろうか。処女作で不定期更新ですが、温かい目で見守ってあげて下さい。

## プロローグ（前書き）

初投稿で不定期更新ですが、よろしくお願ひします。

## プロローグ

プロローグ

???side

「本当に行っちゃうんだな。智則。」

「ああ、できれば卒業までは一緒に居たかったな。達也。」

そろそろ、日が沈みそうな時間に二人の少年は向かい合う。

「そっだ、俺が引越す前にこのカードをあげようと思ってたんだ。受け取ってくれ。」

「? ああ。わかった、じゃあな。また会おうぜ。」

立ち去ろうとする親友に手をふりながら、俺はそのカードをみる。

The supremacy SUN

俺の見たことのないカードだ。家に帰ろうとした時、何かの音が聞こえたが俺はそのまま家に帰った。

~~~~家~~~~

机の前でまた、貰ったカードをまじまじと見る。イラストは男の顔をした悪魔の後ろに黒い太陽があるような感じだ。このカードを貰

つてから、度々何かの音が聞こえるが何なのだろう。

「まあ、考えても仕方ないか。」

「…………お前は私を使いこなせるか…………」

「え？」

また、声がきこえた。

「…………フッフ、やっと声がきこえたな…………」

「っ！ だれだ、おまえは！」

声の主もわからぬまま、自分の頭に響いてくる声に俺は戦慄する。

「…………しかし、おまえが私を持ち、プラネットシリーズを集めるのに適しているかを調べるものが必要だな…………」

何を言っているんだ？ そして、俺の頭に直接響いていることになる。

「…………さあ、デュエルを始めよう…………」

俺の目の前に、俺が今まで見たことも無かった黒いデュエルフィールドが広がり、俺が持っていたThe SUNのイラストから悪魔が消え、目の前に立っていた。

「くっ！」

俺は本能的にデュエルディスクを構え、The SUNの手にもデュエルディスクができていた。

「決闘!!!」

達也 vs SUN 1 (前書き)

いきなりSUNとDELヘルズ。

達也 vs SUN 1

……まずは私のターンからだ。……

……ドロー。私はモンスターを一体伏せ、カードを二枚セット。ターンエンドだ。……

「俺のターン。ドロー。」

SUNのデッキがわからない今、まずは様子見からだろう。

「俺は、ダーク・グレファアを召喚。さらに、ダーク・グレファアの効果発動。手札の墮天使ゼラートを捨て、デッキから墮天使スペルビアを墓地へ送る。いくぞ、バトル！ ダーク・グレファアでセットモンスターに攻撃！」

ダーク・グレファアがセットモンスターを切りつける。

グレイブ・スクワーマー

……グレイブ・スクワーマーの効果発動。ダーク・グレファアを破壊する。……

地面から、グレイブ・スクワーマーが出てきて、ダーク・グレファアを道ずれにしていく。正直、気持ちが悪くなる光景だ。

「俺はカードを二枚セットしターンエンド。」

……さて。エンドフェイズ時に、魔法発動。終焉の焰。黒焰

トークン二体を特殊召喚する。…………

これは、まずい。黒焔トークンは、闇属性モンスターのアドバンス召喚に使用できる。そして、SUNは闇属性。次のターンにはSUNが出るかもしれない。俺のセットカードでどうにかなるのか？

達也

8000 手札二枚

ダーク・グレファア      セットカード二枚

SUN

8000 手札三枚

黒焔トークン二体      セットカード一枚

…………私のターン。ドロ。私は黒焔トークン二体をリリースし、The supremacy SUN、つまり、私を召喚。…………

ちっ、やはりきたか。

…………バトル。SUNでダーク・グレファアを攻撃。…………

黒い光線がダーク・グレファアへ発射される。

たしか、さっき見たときSUNの効果は、破壊され墓地へ送られた次のスタンバイフェイズ時に手札を一枚捨て、墓地から特殊召喚だ

った気がする。ならば、除外すればいいだけだ！

「畏発動！次元幽閉！SUNをゲームから除外する！」

・・・甘いぞ。畏発動。王宮の鉄壁。カードはゲームから除外されなくなる。・・・

まずい。SUNの一番の弱点、除外が封じられてしまった。たしかに、蘇生効果も特殊召喚で奈落の落とし穴などにかかりやすいため、除外対策は必須だろう。そして、ダーク・グレファアが光線に飲み込まれ破壊されてしまった。スペルビアを落とせばいいとはいえ、モンスターがいなくなってしまうた。

・・・私は二重召喚を発動。さらに、私はモンスターを一体セツトし、ターンエンドだ。・・・

二重召喚は一ターンに二度の通常召喚を行うカードだ。あの、セツトモンスターは何だろう？ また、グレイブ・スクワーマーのような除去モンスターなら、次のターン、俺は3000のダメージを受けてしまうかもしれない。

「俺のターン。ドロー。」

悪くない。墮天使アスモディウスだ。

「俺は、手札からヘカテリスを捨て、デッキから神の居城・ヴァルハラを手札に加え、そのまま発動。さらに、神の居城・ヴァルハラの効果で墮天使アスモディウスを特殊召喚。墮天使アスモディウスの効果を発動し、アテナを墓地へ送る。バトル！墮天使アスモディウスでセツトモンスターに攻撃！」

堕天使アスモディウスの翼がセットモンスターを切り裂く。

ライトロード・ハンター ライコウ

．．．．ライコウの効果により、神の居城・ヴァルハラを破壊。  
さらに、自分のデッキの上からカードを三枚墓地におくる。．．．．

堕天使アスモディウスを破壊しなかったのは、それよりも天使を特殊召喚する神の居城・ヴァルハラを破壊しておくべきだと思ったのだろう。堕天使アスモディウスはあとで相打ちし、自分だけ復活すればいいし。

「俺はターンエンド。」

達也

6700 手札一枚

堕天使アスモディウス      セットカード二枚

SUN

8000 手札一枚

SUN 王宮の鉄壁

．．．．私のターン。ドロ。．．．．

なあ、このターン、どう動く？

達也 vs SUN 1 (後書き)

どうでしたか？

ライフポイント8000のデュエルは長いですね。

## 達也 vs SUN 2 (前書き)

SUNとのデュエルの続きです。汎用カード使いすぎですね、使いません。まあ、どう考えても、あるカードの下位互換になるカードは使いませんけど。

達也 vs SUN 2

「……私は、カードガンナーを召喚し、効果発動。デッキの上から三枚墓地へ送り攻撃力が1900になる。バトルフェイズ。SUNで墮天使アスモディウスに攻撃。……」

SUNの黒い光線と墮天使アスモディウスの翼がぶつかり合い、お互いにフィールドから消える。

SUNはいなくなったが、地面からSUNの威圧感が感じられる。

「だが、ここで墮天使アスモディウスの効果発動！アスモトークンとデイウストーンクンを守備表示で特殊召喚する。アスモトークンは効果で破壊されず、デイウストーンクンは戦闘で破壊されない！」

墮天使アスモディウスのミニチュアのような赤と青のトークンがフィールドに出てきた。

よし、アスモトークンはカードガンナーに破壊されるだろうが、デイウストーンクンは戦闘破壊されないため、SUNの攻撃をしのげる！

「……ならば、カードガンナーでアスモトークンに攻撃。さらに、魔法発動。ブラックホール。カードガンナーとデイウストーンを破壊する。……」

「なんだって？」

「……カードガンナーが破壊された場合、デッキからカードを一枚ドロウする。私はこれでターンエンド。……」

「俺のターン。ドロ。」

「…………スタンバイフェイズ時、手札を一枚捨てSUNを特殊召喚する…………」

今引いたカードは死者蘇生。そして、セットカードはリビングデッドの呼び声。勝てる！ 本当は前のターンにも大ダメージを与えることができたのだが、ゴーズが怖かった。ゴーズを出されるとあの状況ではなにもできないからな。案の定、今SUNは最初から持っていたであろうゴーズを捨て、SUNを特殊召喚した。でも、これでもう怖いものはない。

「俺はリビングデッドの呼び声を発動。墓地から、堕天使スペルビアを特殊召喚。さらに堕天使スペルビアの効果発動、墓地から堕天使ゼラートを特殊召喚。堕天使ゼラートの効果発動、手札を一枚捨て、相手  
フィールドのモンスター全てを破壊する。」

…………ぐつ…………

「さらに、死者蘇生発動。SUNを自分フィールド上に特殊召喚する。」

禍々しい悪魔が自分の目の前に出てくる。

…………ほう。これで全てのモンスターでダイレクトアタックすれば、お前の勝ちか…………

「ああ。これでどうだ？」

黒いフィールドが消え、俺はいつもの机の前に戻っていた。

達也 vs SUN 2 (後書き)

いかがでしたか。お気に入り登録して下さい。皆さん、ありがとうございます。

## プラネットシリーズとは！？（前書き）

今回はデュエルありません。プラネットシリーズ誰に持たせるか迷います。

## プラネットシリーズとは!?

.....これほどの実力が.....なるほど、いいだろう。.....

「お前は何が目的なんだ?」

.....私の目的は、世界に散らばってしまった、プラネットシリーズを全て集めること。.....

「プラネットシリーズ?」

.....プラネットシリーズは本来この世界には存在しなかった。しかし、何者かの力によって新たな12個の異世界が生まれ、その世界達とこの世界がぶつかったことにより、その世界にあったプラネットシリーズの一部がこの世界にやってきてしまったのだ。まあ、こう言う私もプラネットシリーズの一枚だがな.....

あれ、でも.....

「たしか、太陽って、惑星じゃないよな? 恒星だよな?」

.....気にするな。おそらく私を作った人がバカだったか、その世界では太陽は惑星だったのだろう。.....

バカって.....。しかも、太陽が惑星だったら、その世界昼無いじゃんかよ、どうすんだよ.....。

.....話が変わったな、では、お前はどっする? プラネットシ

リーズを集めるか？……………

威圧感が増した。こえええええ。

「断つたら？」

……………お前の心の闇を増幅させ、さらに、マインドクラッシュする。……………

心の闇つてあれか、アニメでは全編通して語られてるヤツ。何度もラスボスになつてるもんなあ。そして、マインドクラッシュ。これは、社長がやられたやつか。うっわ、やば、っつか拒否権ないじゃんもうこれ。

「じゃ、じゃあ、何でおれなんだ？」

……………それは、お前がカードの精霊の声を聞ける、数少ない人物だからだ。現に、お前にこのカードを渡した少年は、私の声が聞こえなかっただろ？もし、聞こえていたならば、お前にこれほどまでに危険なカードを渡しはしなかっただろ？……………

……………危険っていう自覚あったのかよ。

……………さらに、お前は私に勝った。こうなると、もうこの世界でプラネットシリーズを集められる人に会う機会はもう無いかもしれない。だから、私はお前に言っているのだ。……………

「まあ、智則に買ったカードだし……………。引き受けるとして、どうやってそのプラネットシリーズを集めるんだ？」

……デュエルをすればわかる。……

「どづいうことだ？」

……さつき、お前とデュエルした時に展開された黒いフィールド……。あれは本来、プラネットシリーズ同士のデュエルで展開されるフィールドだ。プラネットシリーズをどちらかのプレイヤーが使用すれば出てくる。……

「つまり、プラネットシリーズとのデュエルの時は自ずから分かってことか？」

……そんなにたくさんの人とデュエルしないといけないのかよ。随分大変なことだ。

……さらに、デュエルに勝てばそのプラネットシリーズは前の手元にくる。強引な手段を使わなくてもよい。……

まあ、そっじゃなきやなあ……。

……どづする？……

「いいぜ。プラネットシリーズ集めるの手伝ってやる。」

……わかった。急がなくてもよいぞ。……

さあ、今日は新しいデッキでも創るかな。

## 次の日

8:10

「やばい、昨日1時までデッキ組んでたから……。遅刻だあ〜！」

授業は8:30に始まる。俺はデッキは持っていくが、教科書などを碌に持って行っていないという、何がしたいんだかわからない状態で家を飛び出していった。

8:25

「間に……。あつた……。」

起きてから学校に来るのにいつもは30分かかる。それなのに、今日は15分で来れたというのだから、いつもがどんなにだらけているのが分かる。

「おお、達也〜。どうした、こんなギリギリに。」

話かけてきたコイツは竹下 辰哉。よく一緒にデュエルする仲間だ。でも、同じ名前の読みで趣味も同じデュエルだから、間違いやすい。

「じゃあ、早速デュエルしようぜ。」

はあ？ 残り5分だぞ？

「いやさ、俺、昨日新しいデッキ創ったんだよ。」

俺と同じじゃないか。だから紛らわしいんだよ、コイツは。

「デュエル！」

「え？」

気づくとデュエルフィールドが展開されていた。

「「「がんばれよ〜〜」」」

皆もノッてはやしたてる。

「アンタたちもバカねえ。」

こういう、コイツは大林 あかり。小学校からの友達だ。

「お前には、バカって言われたくない！おまえ一回も成績で勝ったことないだろ！」

「うっさいわね！時間ないわよ！」

「ちっ。デュエル！」

宣言が遅れたが、デュエルが開始した。

## プラネットシリーズとは！？（後書き）

プラネットシリーズお互い一枚しか入っていないはずなのに、プラネットシリーズをどちらかが出さないと駄目だという……。見苦しいかもしれません。

## 虫の恐怖！（前書き）

なんか、タイトルでいろいろネタバレしてそうです。

## 虫の恐怖！

「まずは、俺のターン。ドロー。」

この手札なら……。

「俺はカードを一枚セットして、ターンエンドだ。」

俺が伏せたカードは神の警告。大抵のモンスターならこれで止められる。

「俺のターン。ドロー。」

辰哉の口元が笑ったように見える。どういってデッキなんだ？

「俺は手札から、サイクロン発動！達也のセットカードを破壊する！さらに、手札から魔法発動。おろかな埋葬。デッキから昆虫装機ホーネットを墓地に送る。」

昆虫装機か！ORDER OF CHAOSで登場したカテゴリ。毎ターン4ずつアドバンテージをとっていったり、ソリティアをしたりすること有名な凶悪デッキ。辰哉のデッキがソリティア型なら、口元が笑ったことからこのターンに1ターンキルされるかもしれない。

「俺は、昆虫装機ダンセルを召喚。さらに、ダンセルの効果発動、墓地からホーネットを装備カード扱いとして装備する。さらに、手札から甲虫装機ギガマンティスをダンセルに装備する。ギガマンティスを装備したダンセルの攻撃力は2400となる。」

……それで、ホーネットの効果でギガマンティスを破壊して、モンスターを大量展開し、また装備の繰り返しか。もう説明聞くの嫌なんだが。

「さらに、手札から明鏡止水の心をダンセルに装備する。明鏡止水の心は、装備モンスターの攻撃力が1300以上の場合、破壊される！」

なぜ、自分のカードを破壊したのかというと、ダンセルには装備されたカードが墓地へ送られた時、デッキからダンセル以外の昆虫装機を特殊召喚できる効果があるからだ。

……それにしても、明鏡止水の心まで手札にあったのか。

「ダンセルの効果発動、デッキから昆虫装機センチピードを特殊召喚する。」

「そして、ホーネットの効果発動。装備カード扱いとなっている、このカードを墓地へ送ることでフィールド上のカード一枚を破壊する！俺はギガマンティスを破壊！」

WOW！まあ、こうなるよな……。これで、ダンセルの効果により、デッキから昆虫装機二体が出てくる。

「さらに、ダンセルの効果により、デッキからギガマンティス二体を特殊召喚する。」

「センチピードの効果発動、墓地からギガマンティスを装備！ギガマンティスを装備したセンチピードの攻撃力は2400となる！」

……あれ？俺、さっきからずっと見てるだけの気がするけどいいのかな？大丈夫なのかな？

そんな心配をしているうちに、周りがざわついていることに気づいた。ん？攻撃力の合計は……？

ダンセル1000 + センチピード2400 + ギガマンティス2400 + ギガマンティス2400 = 8200

……やばい。

「いくぞ、全員でダイレク………あれ？先生どうしたんですか？」

「……おまえら……。全員席に着け。」

その後、俺らが50分ずっと怒られたことは言つまでもない。

学校終了

「じゃあ、これからいつものな。」

「ああ。」

いつもの、というのは俺達がいつも学校が終わったら行っているカードショップのことだ。

「ふう、アンタたちのせいで今日も怒られたじゃない……。」

「お前だつてはやしたてただろ。」

「辰哉に1ターンキルされそうになったのにそんな偉そうなこと言えるの????」

「……くそっ！あれは、辰哉が1キルデッキだと思わなかったからだよ、それに、俺の手札に冥府の使者 ゴースがいたらどうすんだよ。」

「一番最初にゴースのことを言わなかったのは、ゴースは手札ありませんでしたと言っているようなものよ。じゃあ、わたしはここでまた後でね〜〜。」

最後のフワフワさせた声が気に障る。

……達也。……

「ん？ああ、SUNか。どうした。プラネットシリーズ使いでも見  
つかったか？」

……そうだ。……

「マジで!?!」

早っ！

「で、だれだ？」

……お前が今日デュエルをした竹下辰哉という奴だ。……

「えっ……。」

……お前はこれからそいつと会うのだろう。人のいない場所  
に呼び出し、デュエルしろ。……

「ちょっと待ってって!どうして分かった？」

……そいつが男に怒られた時、デッキを落としただろう。そ  
の時、プラネットシリーズが見えた。The tripping  
MERCURYというカードだ。あれはあまり強くない。手始めに

ちょうどいいだろう。……

「The tripping MERCURYか……。……わかった。」

### カードショップ

「よっ！達也！」

「まだ、あかりは来てないか……。」

「どうした？」

「いや、なんでもない。なあ、お前、プラネットシリーズって知ってるか？」

できれば、SUNの言葉が嘘であってほしい。そんな言葉だった。

「ん？これのことか？」

そうやって差し出してきたのは、The tripping ME  
RCURY

「そうか、わかった、ここじゃなんだしちよつとあつちでデュエル  
しよつぜ。」

「えっ、ちよつ、いつもはここで……」

「なあ、SUN本当にデュエルしないとイケないのか？」

「……なぜ、そう沈んでいる？プラネットシリーズを持っている  
からといっても、精霊の声が聞こえなければプラネットシリーズ  
を集めることはないだろう。それに、持っているからといって悪い  
人間になるわけでもない。……」

「っ！そうか。そうだよな。」

勘違いをしていたみたいだ。NOや闇のカードとかのことを考え  
すぎていた。

「なあ辰哉。俺、今プラネットシリーズを集めているんだ。だから、  
俺が勝つたらそのカード譲ってくれないか？俺もプラネットシリー  
ズ持つてるから、俺が負けたらそれをあげるよ。」

「……おい、待て。プラネットシリーズを持っているなどとプ

ラネットシリーズの前で言ったら警戒するのが当たり前だろう！・・・

「えっ？」

気づけば、辰哉のまわりに黒いオーラができています。

「..」

デュエルだ！The tripping MERCURY！

## 虫の恐怖！（後書き）

昆虫装機強いですよ。僕の友達にも使っている人がいます。何回か召喚を止められれば勝てるのですが……。

初のプラネットシリーズを賭けたデュエル！（前書き）

なにかが違う……

## 初のプラネットシリーズを賭けたデュエル！

「……奴のまわりの黒いオーラ……。すでに、自我を失っている、MERCURYのものになっているだろう……。……」

「くそっ！俺が引き起こしたとは言え、危ないカードじゃないかよ！」

「達也……。始めよう……。」

「「決闘！！」」

「私のターン……。ドロー。」

辰哉のデッキは、朝と同じ昆虫装機のはず。俺のデッキの相性は普通だ。

「私は終末の騎士を召喚……。デッキから、昆虫装機ホーネットを墓地へ送る。そして、カードを4枚セットしてターンエンドだ。」

4枚のセットカード！？辰哉、家で急いでデッキタイプを変えたな！？おそらく、スターライト・ロードでも伏せてあるのだろうか……。でも、使うか。

「俺のターン。ドロー。手札から魔法発動。大嵐。全ての魔法・罫を破壊する！」

「チエーンして罫発動……。スターライト・ロード。大嵐を無効にし、エクストラデッキからスターダスト・ドラゴンを特殊召喚する。」

「  
やっぱりあった……。そして、白銀に光る輝かしい竜が特殊召喚される。」

「まだまだ！さらに、魔法発動。サイクロン。一番右のセットカードを破壊する！」

奈落の落とし穴

危ない危ない。

「モンスター一体をセットして、カードを二枚伏せる。ターンエンド。」

辰哉（MERCURY）

8000 手札一枚

終末の騎士 スタードラスト・ドラゴン セットカード二枚

達也

8000 手札一枚

セットモンスター一体 セットカード二枚

「私のターン……。ドロー。」

お互い最初のターンで手札をかなり消費している。動いて止められたらそのターンは終わりだろう。

「私は、昆虫装機センチピードを召喚、そして効果発「ちよつと待った！畏発動。奈落の落とし穴。センチピードを除外する！」……そうか、ならば、スターダスト・ドラゴンでセットモンスターに攻撃。」

スターダスト・ドラゴンの口から、吐き出された白い光線がセットモンスターを貫く。

ヴェルズ・フレイス

「だが、ヴェルズ・フレイスの効果は発動する。スターダスト・ドラゴンを手札に、つまり、エクストラデッキに戻す！」

「私は終末の騎士でダイレクトアタック……。」

今度は騎士が、剣を俺に刺してきた。

「……………ぐっ！」

「私はこれでターンエンド……。」

ライフポイントの差は1400だけ。次のターンで出させて貰うぜ。

「待った！エンドフェイズ時に魔法発動。終焉の焔。黒焔トークン二体を特殊召喚！」

「そして、俺のターン。ドロ。」

おそらく、残りのセットカードの内、一枚はブラフとみていいだろう。警戒すべきはもう一枚か。

「俺は二体の黒焔トークンをリリースし、現れよ、The supply remasy SUN!!!!」

太陽が影に隠れ、その中から禍々しい悪魔が降臨する。デュエルディスクの演出とはいえ、凄いものは凄い。さらに、俺がSUNを出したことに共鳴するように辰哉のデュエルディスクが光だし、SUNとデュエルした時にも出た、黒いフィールドが展開された。

.....フフフフ.....

あれは、MERCURYの声か？まあ、いい。デュエルで勝てば分かることだ！

「俺は、SUNで終末の騎士に攻撃！」

ダーク・グレファアや、墮天使アスモディウスを飲み込んだ黒い光線が今度は、終末の騎士へ向けて発射される。

「畏発動.....。魔法の筒。攻撃を無効にし、攻撃力分のダメージを相手に与える。」

「何だつて!？」

SUNの攻撃力は3000。つまり、3000ポイントの大ダメージを俺は受けることになる。

SUNの黒い光線が筒の中に入り、今度は俺にとんでくる。

「っ!?!?!?!」

気付いた時には、俺は壁に叩き付けられていた。

「くそっ……。俺はカードを一枚セットしてターンエンド。」

辰哉(MERCURY)

8000 手札一枚

終末の騎士 セットカード一枚

達也

3600 手札無し

SUN セットカード一枚

「私のターン……。ドロ。」

「私はリビングゲデッドの呼び声を発動……。墓地からホーネットを特殊召喚する。さらに、レベル4以下のモンスターが特殊召喚に成功した時、手札からTG・ワールフを特殊召喚。」

TG!?まさか、まだ代行天使は見えていないが、あれはTG代行インゼクターなのか?

「私はこの三体をリリースし……。降臨せよ!The trippin  
ng MERCURY!!!」

## 初のプラネットシリーズを賭けたデュエル！（後書き）

結構時間がかかりました。主人公のデッキは今回はヴェルズでしたが、手札が少ないため、次回も活躍できそうにありません。でも、活躍する機会をつくります！

後、すみません。ヴェルズには終焉の焰なんて入らないと思うんですけど、SUNを一枚でだせて、しかも、攻撃も防げて、ゾンビキヤリアとシンクロもできるから、とさまざまな理由をつけて入れました。

そして、問題の魔法の筒ですね。今はバーンデッキぐらいでしか採用されていないという……。言い訳はしません、いや、できません。しかも、TG代行インゼクターがかなり事故ってます。

The tripping MERCURY (前書き)

MERCURY戦の続きです。

## The tripping MERCURY

MERCURY召喚の宣言と共に、フィールドに二つの剣を持つ、虫の女王が現れた。

The tripping MERCURY  
レベル8 攻撃力2000 / 守備力2000

「MERCURYの効果発動……。MERCURYはアドバンス召喚に使用したモンスターの数によって、効果が変わる。」

リリースしたモンスターは三体。二体リリースより強力な効果なのだろう。

「三対リリースの場合、このモンスター以外のモンスターの攻撃力は0になる……。」

「っ！」

「私はこれでターンエンド……。」

MERCURYで攻撃しなかったのは、攻撃すれば、次のターンSUNは復活しMERCURYはそのまま戦闘破壊される。しかし、攻撃しなければSUNの攻撃力は0のまま、3000に戻すためにはSUNから攻撃しなければならず、攻撃される回数が一回減るからだろう。

「俺のターン。ドロー。」

っ！これなら、賭けにできる！成功確率は50%ぐらいか。ダンセルとセンチピードさえ引かれなければ……

「俺は、SUNを守備表示に変更。ターンエンドだ。」

辰哉(MERCURY)

8000 手札無し

MERCURY リビングデッドの呼び声

達也

3600 手札一枚

SUN

「この程度か……。私のターン……。ドロー。」

「ほう……。私はMERCURYを守備表示にしてターンエンド。」

よしっ！いける！

「俺のターン！ドロー！」

「俺はレスキューラビットを召喚！レスキューラビットの効果発動、デッキからヴェルズ・ヘリオロープ二体を特殊召喚！」

「二体の同じレベルのモンスターか……。」

「二体のヴェルズ・ヘリオロープでオーバレイネットワークを構築！エクシーズ召喚！ヴェルズ・バハムート！」

氷結界の龍ブリューナクを闇化させたようなモンスターが召喚される。

「ヴェルズ・バハムートの効果発動！エクシーズ素材ひとつを取り除き、手札のヴェルズ一枚捨てることにより、相手フィールド上の表側表示モンスター一体のコントロールを得る！俺はヴェルズ・マンドラゴを捨て、MERCURYを選択！」

「何っ……！」

MERCURYがSUNの援護もあって、俺のフィールドに来る。すると、辰哉に付いていた黒いオーラが消え、SUNに吸収された。

「……？あれっ？達也、どうしてこんな所でデュエルしてるんだよ？」

流石に、「辰哉はカードにとりつかれていたんだっ……！」なんて言つと変な目で見られることは確定なので、適当に誤魔化しておく。プラネットシリーズを賭けたことは忘れずに言ったが。

「ふん。まあ、いいか。負けそうだけど、そのカードの使い道分かんなかったし。」

「じゃ、続けるぜ。MERCURYとバハムートで、辰哉にダイレクトアタック！」

MERCURYはその二つの剣で、バハムートは氷の混じった黒いビームで辰哉に攻撃した。

「俺は、ターンエンドだ。」

とりあえずは安心だ。

辰哉

3650 手札一枚

フィールド無し

達也

3600 手札無し

SUN バハムート MERCURY

「俺のターン！ドロー！ちえっ、サレンダーだ。手札がマスター・ヒュペリオンとサイクロンじゃ勝てないよ。」

ふう、勝てた。

家

あの後、あかりが来て他の人とかとも何度かデュエルした。5勝2敗。2敗は、インゼクターだった。

「なあ、SUN。お前は、MERCURYが弱いと言っていたけど、結構危なかったんじゃないか？」

MERCURYが騒いでる気がしたが、既にカードファイルの中なので聞こえない。つつか、MERCURYって女だったんだな、辰哉の変わった口調が印象に残りすぎて、男だと思っていた。もう話す機会はないだろうが。

……そうだな、だがこれで一枚集まったのは事実だ。この調子で、とでも言っておこう。……

辰哉が、プラネットシリーズに……。これほどまでに負けるのが怖かったデュエルは無かった。アニメのUMAはいつも、「デュエルは楽しいものだろ！」と言っていたのに。

プラネットシリーズが惑星の数だけあるとすれば、残り7枚。身近にもいるかもしれない。俺はどんな運命を辿るんだろう。

今日は一日中それを考えていた。

## The tripping MERCURY (後書き)

やっと、SUNを除く一枚目のプラネットシリーズが……！でも、MERCURYははつきり言つと弱いです。なので、これから使うか分かりません。

OCG化されてないプラネットシリーズのステータスは作品上に載せることにしました。効果はその後、キャラクターが言つので載せてません。

## 地区大会（前書き）

タイトルが「地区大会」でありながら、今回はデュエル無しです。

## 地区大会

?????

?????side

「昨日、見たこともないカードを使った奴がいたと話していた奴がいたよ。惑星がなんかとか言ってたから、プラネットシリーズかもね。」

「そうですか。試しに行くのですか？」

「ああ、プラネットシリーズを集めれば〇〇〇が起こることがわかったしね。咲も試してみれば？」

「私はその人のデュエルを見てからにします。あまり危険なことはしないで下さいよ。」

「わかってるぞ。」

次の日、学校にて

達也 side

とりあえず、事情説明だ。

俺は今、学校にいる。で、なぜ事情説明をしなければいけないのか。その理由は、なぜか、俺の席の後ろでSUNとMERCURYが授業を聞いているからだ。いや、おかしいだろ！

もうちょっと、映えるモンスターならいいとして、ごっついモンスター二体が後ろについてくるとか絶望だ。

しかも時々、……彼は、剣闘獣デツキのようだ。デュエルしてみたらどうだ？……とか言ってきてうるさい。俺は十代や遊馬みたいなデュエルバカじゃないんだよ！あゝあ、ハネクリボーとかがよかつたなあ。

そんな事を考えていると、あかりが話かけてきた。

「ねえ、今日は地区大会でしょ。皆も出るんだから、急がないと！」

……忘れていた。地区大会とは、いくつかの学校ごとに行われている、遊戯王の大会だ。1年に一回行われている。

ここでも、遊戯王はデュエルアカデミアが造られるほどではないけれど、学校の半分くらいの人がやっているのだから、当たり前だ。

「うん……、忘れてた。」

「大会を忘れるなんて……。早く行きましょうよ。」

### 大会後

俺の結果は8位だった。墮天使で出たのだが、準々決勝でミラーマツチになり、先に大天使クリスティアを出されて負けてしまった。4位以内に入れば市大会に出れたのだが……もうちょっと改良が必要だな。

因みに辰哉は2位で市大会進出が決定し、あかりは32位だった。まあ、大会参加人数は400人ぐらいだったから、皆良い結果を取ったと言えるのだが、

「よっしゃ、市大会進出！」

さっきからずっとこう言っているのが、ウザい。

「はあ〜。いいなあ〜市大会。あたし、一回も出た事が無いし…」

……あかりのデッキはクリボーデッキだ。つまり、機雷化や増殖で頑張るデッキなのだが、世間一般ではファンデッキと呼ばれている。それを、クリボーかわいいなどという理由で作るのは凄いと思う。しかも、結構勝ってるし。

「辰哉、市大会っていつだったっけ？」

「え？一週間後だけど？」

「ふーん。わかった見に行くよ。」

「応援よろしく〜」

あと一回デュエルに勝ってれば、市大会に出れて、たくさんの人が見ている中でコイツを無残にぶつつぶせたかもしれないのに……。

「っ！あたし、ちょっと学校に忘れ物してきちゃった！なんで、大会の時気付かなかったんだろ？」

「じゃあ、取ってこいよ。」

「それだけ？取ってきてくれてもいいんじゃないの？」

「いや、それはない。」

当たり前だ。だれがパシリになるか。

「……じゃあ、あたしはここで。」

その後、辰哉とも別れ家に入ろうとしたところ、家の前に一人の少女がいた。

「あの……うちに何か用ですか？」

「あの、佐藤達也さんって方はいらっしゃいますか？」

「えっと……俺ですけど。」

「っ！そうですか。あの、デュエルしませんか？大会で見たんですけど、それでデュエルしたくなつて！」

「いいですけど……あの誰ですか？」

「あつ、私は永澤咲っています。あの、できれば、The supremacy SUNってカード見せて貰えますか？」

俺は大会中にSUNを引けば、プラネットシリーズを集めるためとか、死皇帝の陵墓で出しやすいことから、SUNを召喚してしまっている。地区大会では、会場には係の人がいるものの、それぞれのデュエルに審判はいない。デュエルディスクでも全て判定できるからだ。流石に都大会とかになると観客も増えるし審判もいるけどね。

触らせるのは拙いかもしれないけど、見せるだけならいいだろう。

「このカードだよ。」

「……やめろ!!! 見せるな!!!!」

「なんでだ? それにもう見せてしまった。」

「……ちっ……」

「ふふふ、姿はみせなくても声だって聞こえるんですよ?」

「なんの事を……まさか!」

「お察しの通りです。私には精霊が見えるんですよ。まあ、あなたもそのようですが。私、プラネットシリーズも持ってるんですよ。どうします? デュエルしますか?」

「プラネットシリーズを相手が持っている以上、デュエルするしかない。今逃げても、状況が悪いときにもう一度挑まれるだけだ。その時は逃げられないかもしれない。」

「……わかった。やろう。」

「お互いにデュエルディスクを構える。」

「「決闘!!!」」

## 地区大会（後書き）

SUNが見える人がはやくも登場しました。

永澤 咲さんが何をしていたか、ですが、彼女は今回の地区大会には出ず、プラネットシリーズを使っている人がいないかを探していました。

## 謎の人物！？（前書き）

まだ、あんまり、話数がないのに核心にせまってきました。

## 謎の人物！？

### 学校

あかり s i d e

なんで、忘れ物なんかしちゃったんだろ。あゝあ、めんどくさい。

「先生、あの、忘れ物しちゃったので教室に取りに行ってもいいですか？」

「ん？ああ、大林か。いいぞ。」

この学校って広いから、教室まで来るのにも時間がかかるのよねえ。まあ、いいけど。

ガサガサッ

ん？何の音だろ？

「ふう、やっとみつけたよ。ここが、佐藤達也君の席か。やっぱり、少しだけ感じるね。」

「あの……何をしているんですか……?」

「ん? ちょっと、彼に用があつてね……。つて、君は大会の時の!」

「っ! この人、私が負けた相手じゃない!

「君もこの学校なのか……。面白いな。」

「え?」

「いや、なんでもない。じゃあね。」

「え、ちょっと!」

帰ってしまった。

その後、私は忘れ物をとってから帰った。

## 達也の家の前

達也 side

俺は家の前にいた、カードの精霊がみえる、と言っている少女とデュエルしている。

「俺のターン。ドロー。」

最高の手札だ。

「俺は、モンスター一体をセットし、カードを二枚セット、ターンエンドだ。」

「私のターン。ドロー。」

「私は、魔法発動、次元の裂け目。墓地へ送られるモンスターは全て除外されます。」

やっかいなカードだ。だが、今は作戦通りにするべきだろう。

「私は、神獣王バルバロスをリリースなしで召喚します。バルバロスのレベルは8、攻撃力は3000ですが、リリースなしで召喚でき、攻撃力が1900になる効果があります。」

それでも、通常召喚できる攻撃力1900モンスターだ。強いな。

「私は、バルバロスでセットモンスターに攻撃します。」

バルバロスの持っているスピアーが、カードごと貫く。

スポーア

「残念でしたね。スポーアは、墓地の植物族一体を除外し墓地からその分レベルを上げて特殊召喚する効果がありますが、次元の裂け目により、ゲームから除外されます。」

寧ろ、お前のほうが残念だったな。説明は負けフラグだ。

「私は、カードを一枚セットし、ターンエンドです。」

「ターンエンド前に、魔法発動。サイクロン。今伏せたカードを破壊する！」

スキルドレイン

危ねえ、破壊しといてよかった。

達也

8000 手札三枚

セットカード一枚

咲

8000 手札三枚

神獣王バルバロス 次元の裂け目

「俺のターン。ドロー！」

SUNを引いた。流石に、テンションが上がってきた。

「俺は、レッド・ガジェットを召喚！効果を発動し、デッキからイエロー・ガジェットを手札に加える！」

「ガジェット……。それぞれがサーチしあう効果を持ち、除去しながら戦うデッキですか。」

「さらに、罨発動。血の代償！500ライフポイントを払い、もう一度通常召喚できる。俺は、500ライフ払いさつき手札に加えたイエロー・ガジェットを召喚！効果発動。デッキからグリーン・ガジェットを手札に加える！」

「さらに、500ライフ払い、グリーン・ガジェットを召喚！効果発動。デッキからレッド・ガジェットを手札に加える。」

これの繰り返しにより、俺の場には、レッド×2・イエロー×2・グリーン・ガジェットの5体のモンスターが並び、さらに、グリーンガジェットを手札に加えることができた。

「俺は、また500ライフ払う。レッド・ガジェットとイエロー・ガジェット一体ずつをリリースし、現れよ！The supreme

acy SUN!!!」

何度見ても迫力のある、禍々しい悪魔が召喚された。

だが……The tripping MERCURYの時には展開された、黒いフィールドが展開されない。

「どっついうことだ、SUN。」

……これは……恐らく、彼女がプラネットシリーズを持っていない、ということだろう。……

SUNが苦々しい顔で告げる。

「！」

確かに、彼女はSUNの声が聞こえていたし、姿も見えるようだが、精霊の姿が見えるとはいっても実際にプラネットシリーズを持っているかどうかは別なのだ。

「……おまえ、プラネットシリーズを持っているって話は、俺にデュエルさせるための嘘だな？」

「バレちゃいましたね。そうですね、プラネットシリーズを持っているって聞いたのでデュエルしたかっただけです。」

「くそっ！何でこんな事をしているんだ？」

「……。デュエルはまだ終わっていませんよ。」

スルーされた。言いたくない理由があるのか、それとも、ただスルーしただけなのか。後者だったら泣けてくる。

「俺は、グリーン・ガジェットを召喚。効果を発動し、レッド・ガジェットを手札に加える。」

「そして、リミッター解除を発動！全ての機械族モンスターの攻撃力は二倍になる！」

「SUNでバルバロスに攻撃、ガジェットでプレイヤーにダイレクトアタック！」

8000 - 11000 - 28000 - 26000 - 24000 - 28000 〓  
- 4700

オーバーキルで勝った。しかし、納得がいかず、訳の分からない事もたくさんあった。永澤さんに話を聞こうとしたところ、既に彼女はいなかった。

「なあ、SUN。プラネットシリーズを持っている人が集めるのはいいとして、何でプラネットシリーズを持っていない人まで興味を持っているんだ？」

「……楽観的にみれば、珍しいカードだから、という理由だろうが、そうではないだろうな。私にもわからない。……」

その後、俺は、何事も無かったように家に帰った。

?????  
-

?????side

「どうだった？」

「……1ターンキルの上、4700のオーバーキルでした……。次は……。」

「まあ、いいじゃないか？僕だって目当ての人を二人も見つけちゃったし。」

## 謎の人物！？（後書き）

主人公の今回のデッキは代償ガジェットです。NO.16でトラゴエディアとゴーズなどを防ぐのが普通でしょうが、できるだけオーバークルしなかったので、エクシーズはしませんでした。

辰哉の協力を得るために（前書き）

今回はデュエル無しです。なんか、デュエルのほうが本編の他の部分より長いような気がするのですが、まあ、気のせいでしょう。

……日常の話書くのが難しい。

## 辰哉の協力を得るために

達也の家

達也 side

永澤咲さん……彼女はプラネットシリーズが見たいと言っていた。さらに、それを調べる理由もあるようだった。

「何が目的なんだ……？」

プラネットシリーズを集めることに何か意味があるのか。

「くそっ！わからない！」

どうする、誰か頼りになる人は……。

辰哉？いや、これ以上関わらせないと決めた。

なら、あかり？もっとだめだ、もとから関わってないのにわざわざ関わらせるなんてバカバカしすぎる。

……

俺は携帯を手にとった。

「辰哉、少し話がある。」

## カードショップ

俺は、いつものカードショップに行った。既に、そこにはもう辰哉がいた。

「で、何？話って？」

「いきなりだけど、プラネットシリーズのこと詳しいか？」

「え？」

「お前が持ってた、MERCURYとかのことだ。」

「ああ、あれか。で、それがどうかしたのか？」

「あれには、カードの精霊が宿ってる。」

「……………」

……………

おもいつきり変な人を見るような目で見られた。こんなんだから、この世界は不条理なんだ……………。

「ま、まあ、気を取り直して。なんで、そんなこと言っただ？」

「俺は、最初に、引越したある友人からThe supremacy SUNってカードを買った。で、俺は、そのSUNに頼まれてプラネットシリーズを集めることになった。そしたら、お前がプラネットシリーズを持っていることを知った。」

「うん。それで？」

「俺は、お前に話を聞いたけど、その途中で俺もプラネットシリーズを持っていて、それを言ってしまった。だから、お前はMERCURYに取り憑かれ、俺とデュエルした。」

「なんで、達也がプラネットシリーズを持っている、って言ったらいきなりMERCURYは俺に取り憑いてお前とデュエルしたんだ？それに、お前はデュエル中に自我があって、俺は自我が無かったんだ？」

……………あれ？

なんでだろう？

「なんでなんだ、SUN？」

SUNが俺のデッキケースから現れた。呼び出す度にこうなるのは、結構精神的にきついんだが。だって、俺の体以上の大きさがある悪魔が出てくるんだぜ、そりゃ怖いだろ。

……それは、彼が精霊を見えないからだ。お前は、私と話すことができ、デュエルもして、お前の方が強いことがわかったが、彼は精霊と話すことができないため、MERCURYの意思でデュエルをした。……

なるほど、そういうことが。

「そういうことらしい。」

「え？つつか、達也誰と話してたんだよ。」

「ああ、プラネットシリーズの一枚、SUNと話してた。」

「……まあ、まだ信用できないけど、いいや。それで、理由は？」

「理由は、辰哉が精霊と話せないかららしい。俺は、SUNとデュエルし、勝ったからSUNより強いことがわかったけど、お前は、精霊と話することができないからMERCURYが実力を知ることができず、MERCURYの意思でデュエルをしたらしい。」

「うーん。だけど、その話は全部、カードの精霊がいるって前提の話だよな。いなければ、全部成り立たない。」

それは、そうだ。カードの精霊が見えない人は、カードの精霊がいなくても、精霊は見えないのだから。

「……なら、いくら議論しても仕方ないな。それなら、これはどうだ？俺と達也がデュエルして、俺が勝ったら、カードの精霊がいないうこととする。達也が勝ったなら、カードの精霊はいることとし、俺もできる限り協力する。」

それは……

「もちろん、お前が負けても俺が、カードの精霊がいるってわかるようなことが起きれば、カードの精霊のことは信じるけどな。」

それだったらいいだろう。

「わかった。やろう。」

お互いにデュエルディスクを構えた。

「「決闘!!」「」

## 辰哉の協力を得るために（後書き）

永澤さんとのデュエルを終えたら、日常の話を書こうとしたのですが、この手の話って休みがつかれないようで、どんどんストーリーが進んでいってしまいます。とりあえず、一段落させないといけな  
いみたいです。

V S 辰哉（前書き）

みんながみんな新しいデッキを使うので、整理が大変です。

デュエルの話は一話で終わらないことが多いです。

V S 辰哉

「まずは、俺のターン、ドロー。」

先攻をとられた。今回はどんなデッキでくるんだ？

「俺は、エーリアン・ウォリアーを召喚！さらに、魔法発動、古代遺跡コードA！カードを一枚セットしてターンエンドだ。」

エーリアンか！辰哉が一番最初につくったデッキだ。

「俺のターン。ドロー。」

「俺は、デッキの上からカードを三枚墓地に送り、光の援軍を発動！デッキから、ライトロード・ハンター ライコウを手札に加える。」

墓地に送られたカードは……

ブラック・ホール ドッペル・ウォリアー トラップ・スタン

「俺は、モンスターを一枚セットし、ターンエンドだ。」

もちろん、ライコウをセットした。

辰哉

8000 手札三枚

エーリアン・ウォリアー 古代遺跡コードA セットカード一枚

達也

8000 手札五枚

セットモンスター一体

「それは、ライコウか？俺のターン、ドロー。」

「俺は、クリッターを召喚！バトルフェイズ、俺はクリッターでセットモンスターに攻撃！」

クリッターが裏側のカードに向かって、突っ込んでくる。

ライトロード・ハンター ライコウ

「俺は、ライコウの効果発動。フィールド上のカードを一枚破壊する！」

破壊すべきなのは、セットカードか古代遺跡コードAだが……

「俺は、古代遺跡コードAを破壊！」

このカードは後々厄介になるだろう。

「その後、デッキの上からカードを三枚墓地へ送る。」

送られたのは、スポーア 調律 クイック・シンクロンの三枚だ。

「なら、俺は、エアリアン・ウォリアーで達也にダイレクトアタック！」

槍が俺を突き刺す。

「ぐっ……」

「俺はこれでターンエンドだ。」

「俺のターン。ドロー。」

「俺は、手札からジャンク・シンクロンを召喚！さらに効果発動、墓地からドツペル・ウォリアーを特殊召喚！」

「さらに、手札からレベル・ステイラーを捨て、クイック・シンクロンを特殊召喚！」

「クイック・シンクロンのレベルを1下げ、墓地からレベル・ステイラーを特殊召喚する！そして、レベル4クイック・シンクロンにレベル2ドツペル・ウォリアーをチューニング！」

クイック・シンクロンが四本の輪になり、ドツペル・ウォリアーを包みこむ。

「シンクロ召喚！現れよ、ドリル・ウォリアー！」

ドリル・ウォリアーのチューナーは、ドリル・シンクロンに固定されているが、クイック・シンクロンはシンクロンと名のつくモンスターへの代わりとすることができる。

「さらに、シンクロ素材になったドツペル・ウォリアーの効果発動。ドツペル・トークン二体を攻撃表示で特殊召喚する！しかし、ファイ

「ルドのモンスターは四体のため、トークンは一体だ。」

「そして、レベル3ジャンク・シンクロンとレベル1ドッペル・トークンとレベル1レベル・ステイラーをチューニング！現れよ、A・O・Jカタストル！」

今度はジャンク・シンクロンが三本の輪になり、ドッペル・トークンとレベル・ステイラーを包み込むことにより、A・O・Jカタストルが特殊召喚される。

「バトルだ！ドリル・ウォリアーでエアリアン・ウォリアーに攻撃！」

ドリルがエアリアン・ウォリアーを削りきる。

「だが、エアリアン・ウォリアーの効果発動。ドリル・ウォリアーにAカウンターを二つ乗せる！」

「さらに、A・O・Jカタストルでクリッターに攻撃！」

今度はクリッターに体当たりする。

「だが、クリッターの効果発動。デッキから、エアリアン・モナイトを手札に加える！」

仕方ない、今はモンスターを減らしておきたい。

「俺はドリル・ウォリアーの効果発動。手札を一枚捨て、このカードをゲームから除外する！」

「俺が捨てたのは、ダンディライオン。ダンディライオンの効果により、綿毛トークン二体を守備表示で特殊召喚！」

「俺は、ターンエンドだ。」

辰哉

6200 手札四枚

セットカード一枚

達也

6200 手札二枚

A・O・Jカタストル 綿毛トークン二体

「俺のターン、ドロ！」

辰哉はおそらく、このターンでさっき手札に加えたエアリアン・モナイトの効果によりあのモンスターを呼び出すだろう。

「俺は、エアリアン・モナイト召喚！さらに、効果を発動し、墓地からエアリアン・ウォリアーを特殊召喚する！」

「俺は、レベル1エアリアン・モナイトに、レベル4エアリアン・ウォリアーをチューニング！」

エアリアン・モナイトが一本の輪になり、エアリアン・ウォリアーを包み込む。

「現れよ、宇宙獣ゴルガー！」

地球を侵略するための、巨大な獣が現れる。

「俺は、宇宙獣ゴルガーでA・O・Jカタストルに攻撃！」

「？カタストルの効果を知らないにの？カタストルは、闇属性モンスター以外と戦闘を行う時、そのモンスターを破壊する！」

「効果くらい知ってるよ、俺はセットされていた魔法発動、月の書！カタストルを裏側守備表示に変更する！」

カタストルの効果はダメージ計算前に発動する効果だ。裏側になってしまえば、効果は発動されない。

ゴルガーのたくさんの触角から光線が出て、カタストルを焼き尽くす。

「俺は、フィールド魔法、古の森を発動。」

フィールドが、木々の隙間から木漏れ日がもれだす森になった。

「古の森の効果により、守備表示の綿毛トークンは全て攻撃表示になる。」

「そして、ゴルガーの効果により、古の森を手札に戻しゴルガーにAカウンターを一つ置き、また古の森を発動。ターンエンドだ。」

「俺のターン。ドロー。」

さあ、出させてもらっぜ。SUN<sup>精霊</sup>を！



V S 辰哉（後書き）

今回の主人公のデッキはジャンクドッペルです。規制かけられたの結構痛いですね。

あと、章を追加することにしました。

辰哉との決着　そして……（前書き）

はい、決着です。残りのデュエルがとても短くなってしまったので、次話にするつもりだった話も入れました。

辰哉との決着　そして……

「スタンバイフェイズ時にドリル・ウオリアーはフィールドに特殊召喚され、墓地からジャンク・シンクロンを手札に加える。」

呼ばせてもらおうか！

「俺は、綿毛トークン二体をリリースして、アドバンス召喚！  
The supremacy SUN！」

説明はもう飽きた。

「辰哉、これがプラネットシリーズだ！」

「……いや、俺にはよくわからないし。まあ、言われてみればそうなのか、ぐらいだよ。」

「まあ、いいや。俺は、魔法発動。死者蘇生。墓地からA・O・Jカタストルを特殊召喚！さらに、ジャンク・シンクロンを召喚し、効果発動！墓地からレベル・ステイラーを特殊召喚！」

「……っ！レベルの合計が9になる組み合わせがあるっ！」

「レベル3ジャンク・シンクロンにレベル5A・O・Jカタストルとレベル1レベル・ステイラーをチューニング！シンクロ召喚！氷結界の龍トリシューラ！」

「トリシューラの効果発動！手札一枚と宇宙獣ゴルガーと墓地のエリアン・モナイトをゲームから除外する！」

「バトルフェイズだ。トリシューラとドリル・ウォリアーでダイレクタアタック！とどめはSUNでダイレクタアタックだ！」

62000 - 27000 - 24000 - 30000 = 19000

「……負けた……。」

「なんか悪いな。こんな形で協力してもらっなんて。」

「いや、それが条件だろ、これでいい。プラネットシリーズのこと  
でなんかあれば、俺を頼れよ。」

「……ありがとう。」

これは、辰哉の株を上げるためのイベントなのか？  
まあ、協力してくれるんだし、ありがたい。

「じゃ、俺はこじで。」

「ああ、また明後日な。」

二日後、デュエル会場

「あかりさん、デュエルだ！」

「え？何？ちょっと！」

あかりはそのまま引きずられるようにして、デュエルをせられてしまった。

どうしてこうなった……。

一時間前

「今日が、市大会の日ね。」

「ああ、俺、どこまで勝てるかな？」

「昆虫装機なら、結構勝てるんじゃないか？」

昆虫装機で市大会に進出した、という話は他の大会でも多い。

「じゃあ、ちょっと手続きすませてくる。」

「行ってらっしゃーい。」

「辰哉遅いな。」

「うん、もう一時間になるかも。まあ、あたし達は他の人がデュエルしてるの見てるから退屈しないけど。どうするの？探しに行く？」

「ああ、そろそろ大会開始するしな。」

あいつは大会で女の子の人に声をかけるようなやつじゃないし……なにがあったら大変だ。

そんなに探さなくとも、辰哉は見つかった。だが……

「ねえ、ちよつと大会一緒にまわろうよ。いいでしょ。」

「いや、俺待ち合わせてる人がいるから……。」

「そんなのいいじゃん。」

「……だめだろ。つつか、なんで俺に付きまどってくるんだよ!」

「一目惚れしたの!」

「なにがあつた!」

「……。」

そんなやり取りをしている辰哉の姿があつた。

すると、辰哉がこつちを振り向いた。できれば、関わりたくなかつたがダメなようだ。

「っ!達也、あかり!助けてくれ!」

「……なにしてんだよ……。」

「っ!そつだ!竹下奈津美さん、この人が俺の彼女の大林あかりだ!」

「えつ、あたしそんなこと一度も……。」

辰哉今、あの女の子のこと竹下さんって言ったよな。あの人たち結

婚してたのか。その上、あかりを彼女だと言っなんて……

「おい、達也！それは本来、心の中で言う台詞だ！それに、この人と俺は結婚なんかしてない！ただの同姓だ！」

おお、知らないうちに声に出していたのか。一瞬、地の文を読むな、って言いそうになったよ。

「ってか、あたし一回もアンタの彼女になんかあったことないわよ！」

「ほら、辰哉君。そう言ってるじゃない。」

辰哉、八方塞がりだ。諦める。

「いや……。そうだ、竹下さん、あかりとデュエルしてくれ！あかりが勝てば、竹下さんは俺から一生離れてくれ。」

一生って……。そんなに嫌なのか。それに、デュエル万能説をこれ以上支持するなよ、気のせいかな、この頃俺のまわりにリアリストがいないんだよ。

「……わかった。」

そして、今に至る。

巻き込まれたあかりは渋々といった感じでデュエルを開始した。

「決闘！」

辰哉との決着　そして……（後書き）

辰哉君が凄いことに……

でも、本当はクリボーデッキのデュエルを書きたかっただけだった  
りします。

ただ、あかりの引きがあまりにも凄いです、ご了承ください。

辰哉の波乱！（前書き）

やっと書きたかったクリボーデッキのデュエルです。

## 辰哉の波乱！

「じゃあ、まずはあたしのターンね。ドロー。」

あかりの持っているデッキはクリボーだけのはずだ。

「あたしは、クリボーを召喚！さらに、カードを三枚セットしターンエンド。」

クリボーを攻撃表示……なら、あのセットカードは十中八九あれだろう。

「クリボーを攻撃表示？バカなの？私のターン、ドロー！」

「私は炎熱伝導場を発動、デッキからラヴァル炎火山の侍女を二体墓地へ送る。」

いきなり、伝導場か。これで真炎の爆発が竹下さんの手札にあれば、あかりはかなりキツいかもしれない。つつか、竹下さんって言い方紛らわしいな。俺は、辰哉のこと辰哉って呼んでるからいいけど。

「侍女の効果発動！一体はデッキからラヴァル炎樹海の幼女を墓地へ送り、もう一体はラヴァル炎火山の侍女を墓地に送る！さらに、今墓地へ送った侍女の効果を発動し、デッキからラヴァル炎湖畔の淑女を墓地へ送る！」

一気に五体のモンスターが墓地へ送られた。

「私は、ラヴァル・ランスロットをリリース無しで召喚する！ラヴ

アル・ランスロットはレベル6だけど、リリース無しで召喚できるんだよ。その場合は、エンドフェイズ時に破壊されるけどね。」

「さらに、魔法発動。真炎の爆発！墓地の守備力2000の炎属性モンスターを可能な限り特殊召喚できる！」

特殊召喚されたのは、ラヴァル炎火山の侍女二体とラヴァル炎湖畔の淑女とラヴァル炎樹海の幼女だ。

「いくよ！ラヴァル・ランスロットとラヴァル炎樹海の幼女をチューニング！シンクロ召喚！レッド・デーモンズ・ドラゴン！」

赤い悪魔竜が出てきた。この布陣はあの竜を出すためだろう。

「さらに、レッド・デーモンズ・ドラゴンとラヴァル炎火山の侍女とラヴァル炎湖畔の淑女をダブルチューニング！シンクロ召喚！スカーレット・ノヴァ・ドラゴン！」

今度は本命の巨大な悪魔竜が特殊召喚された。その巨大さに他の大会参加者までこのデュエルを見るようになった。

「やばい……あかり、お願いだから勝ってくれ……！」

隣で辰哉が必死にお願いをしている。変な画だ。

「スカーレット・ノヴァ・ドラゴンは墓地のチューナーの数×500ポイント攻撃力がアップする！だから、攻撃力は6000！」

さらに、スカーレット・ノヴァ・ドラゴンは相手のカードの効果で破壊されず、攻撃された時も除外して無効にすることができる。と

ても強力なモンスターだ。

「いくよ！バトルフェイズ！スカーレット・ノヴァ・ドラゴンでクリボーに攻撃！」

まあ、セットカードを発動するだろう。

「あたしは、セットされてた魔法をクリボーをリリースして発動。増殖！自分フィールド上にクリボートークンを可能な限り特殊召喚する！」

あかりのフィールドにモンスターはいない。つまり、五体のトークンが特殊召喚される。

「えっ！なら、私はスカーレット・ノヴァ・ドラゴンで一体のクリボートークンを攻撃！」

あっけなく一体は破壊された。

「私は、これでターンエンド。この時、フィールド上の侍女はゲームから除外される。」

？ セットカードが無いのか。なら、あかりが動くかもしれない。

あかり

8000 手札二枚

クリボートークン五体      セットカード二枚

奈津美

8000 手札三枚  
スカーレット・ノヴァ・ドラゴン

「あたしのターン。ドロー。」

あ、あかりが笑ってる。わかりやすい人だなあ。

「あたしはプリーステス・オームを召喚！さらに、プリーステス・オームの効果発動！自分フィールド上のクリボートークン四体と自身をリリースして、一体につき、800ポイントのダメージを与える！」

「ってことは、私は4000ポイントもダメージを受けるの!？」

クリボートークンやプリーステス・オームが竹下さんに体当たりしている。

……あれ痛そうだなあ、一回だけだと思ったら、何回も体当たりしてるし。

「さらに、あたしはセットされてた罠を発動。リビングデッドの呼び声！墓地から、プリーステス・オームを特殊召喚！」

決まったな……。ここで、無意味にプリーステス・オームを特殊召喚する意味は無い。ならば、あかりはこのターンで決着をつけようとしているのだろう。

「さらに、魔法発動。クリボーを呼ぶ笛！デッキから、クリボーを特殊召喚して、増殖を発動！四体のクリボートークンを特殊召喚す

る！」

「えっ……もしかして私……」

「リーステス・オームの効果発動！五体全てをリリースして、4000ダメージを与える！」

「きっ、きゃああああ！」

4000 - 4000 = 0

「良かった〜。あかりが勝ってくれて。」

スカーレット・ノヴァ・ドラゴンを出された時は凄い悲愴な顔してたけどな。

そういえば、あかりはスカーレット・ノヴァ・ドラゴンにはいっさい触れなかったな。まあ、機雷化で破壊できないからか。

「ねえ、ちよつとあかりさん来て。」

「えっ、あたしが勝ったから、それで終わりじゃないの!?!」

あちらは修羅場になるようだ。

「そろそろ、大会始まるから、見ててくれよ！」

辰哉は次々と勝ち抜いていった。

それが途切れたのは、準々決勝のことだった。それに、俺が隣のデユエリストと話している間の一分で負けてしまった。

「僕は、攻撃力7600のThe big SATURNで昆虫装機ダンセルに攻撃！」

「うわあああああ!!!」

俺が見れたのはここだけだった。

.....奴をたおすぞ。.....

「.....わかってるぞ。」

## 辰哉の波乱！（後書き）

スカーレット・ノヴァ・ドラゴンが空気化してしまった……。

まあ、クリボーデッキの基本的な除去の仕方は機雷化ですので、それが効かない相手はスルーするしかないんですけどね。

あと、数デュエルで、ただプラネットシリーズを集めるだけの話は終わると思います。

**The big SATRUN (前書き)**

今回、微妙なところでわけてしまいました。

## The big SATRUN

「……残念だったな、辰哉。」

「……ああ。だけど、見てたならわかってるよな、あいつプラネットシリーズ持ってたぞ。」

俺が、辰哉が負けた最後のデュエルの、しかも一番最後しか見てなかったことは言わない。

「俺、大会終わったらあいつにデュエル挑んでくる。」

「がんばれよ。あいつは強かったぞ。」

そのプラネットシリーズ使いはそのまま優勝してしまった。

「おい、デュエルしろよ。」

「ん？ああ、佐藤君か。」

こいつ、俺の名前を知ってる！？

「なにをそんな驚いた顔をしてるんだい？プラネット使い同じ者としては、他の人のことは知ってて当たり前だよ。」

「おまえ……」

「大丈夫だよ、安心して。僕のプラネットシリーズの数は一枚だけだから。」

自分のプラネットシリーズの数を態々教えた……？

「まあ、僕はカードの精霊と話せるけどね。ああ、そこにいる咲も精霊が見えるよ。」

奥にいた少女が俺に向かって頭を下げる……って、あの人は永澤さんじゃないか！

「まあ、わからないこともいろいろあるだろうけど、とりあえずデユエルしようよ。」

そして、大きな声を出す。

「市大会優勝者（まあ、日本の王者になる気もあるけどね）、この平恭介全力でお相手しよう……！！」

……？何がしたいのかと思っていると市大会優勝者のデュエルということで、たくさんの方がこのデュエルを見ようとしている。しかも、なぜか決勝戦のフィールドに連れてこられた。

まさか、こいつ！

「？ ああ、安心しなよ。僕は別に、他の人が見ているところだからプラネットシリーズが出しづらい、なんて状況が作りたいたいわけじゃない。僕も、どんどん出すよ。」

なにが目的なのかわからない……この感覚は永澤さんの時と同じだ……。

「決闘！！」

「まずは僕のターンからだね。ドロー。」

あいつは、さっきデッキを変えていた。プラネットシリーズ使いが相手だから、本気のデッキを使うのか……？いや、それなら他のプラネットシリーズ使いに遭遇する可能性の高い本戦で使うはずだ。それとも、俺程度の相手なら、弱いデッキでもいいってことか……？いや、態々弱いデッキにする必要がない。何故だ？

「（フツツ、彼はとまどっているようだね……。彼は僕の目的に気付いていないみたいだ。あかりさんもまだいないし……。）僕は手札からおろかな埋葬を発動し、デッキからThe big SAT URNを墓地へ送るよ。」

プラネットシリーズの存在が宣言されたことにより、黒いフィールドが展開される。

つつか、このフィールドは、プラネットシリーズを召喚しなくても、その存在が確認されれば展開されるんだな。

さらに、まわりの人が謎の黒いフィールドにざわついている。

「僕は、1000ライフ払い、魔法発動。深淵の指名者。属性と種族を宣言して、そのモンスターを相手はデッキか手札から墓地へ送る。僕が宣言するのは、闇属性・悪魔族だ。」

SUNを狙ったのか。だが、甘い！

「俺は、デッキから暗黒界の龍神グラフィアを墓地へ送る！」

俺のデッキは暗黒界だ。

「ふーん。暗黒界か。君はいろんなデッキ使うから、SUNと同じ属性・種族のモンスターが入ってるデッキとはデュエルしないと思っただけ、僕も運が悪いなあ。」

「どうするんだ？」

「僕は、死者蘇生を発動して、墓地のSATRUNを攻撃表示で特殊召喚するよ。そして、カードを二枚セットして、ターンエンドだ。」

攻撃もできないのに、SATRUNを蘇生？暗黒界の除去力を知らないのか？

「別に、僕はプレイングミスをしたとは思ってないよ。」

あいつは不敵な顔をしてこっちを見ている。

「考えても始まらない！ドロー！」

「俺は、暗黒界の取引を発動。お互いカードを一枚ドローして、一枚捨てる。俺は、暗黒界の龍神グラフィアを捨てる。」

「僕は、ネクロ・ガードナーを墓地へ送るよ。」

ネクロ・ガードナーか、厄介なカードだ。

「（デュエルを引き伸ばすために、このカードを入れたけど、暗黒界なら早く決まってしまうだろうなあ。）それで、グラフィアの効果を発動かい？」

「ああ、俺はSATRUNを破壊！」

プラネットシリーズがあっけなく破壊される。

「フフツ、SATRUNが相手のカードの効果によって破壊されたため、効果発動。お互いは、その攻撃力分のダメージを受ける。」

っ！お互いに2800のダメージか！

「でも、僕はダメージを受けたくないから畏発動。地獄の扉越し銃。自分が受ける効果ダメージは代わりに相手が受ける。」

まさか、俺は5600のダメージを受けるのか……？

「ぐわあああああああ！！！！」

俺のライフポイントは残り2400。つまり、次SATRUNが復活したら、それをカード効果で破壊してはいけないということだ。

「俺は、暗黒界の狩人ブラウを召喚。さらに、それを手札に戻し、墓地からグラフィアを特殊召喚！」

「さらに、グラフィアでダイレクトアタック！」

「僕は、畏発動。リビングデッドの呼び声。墓地から、SATRUNを特殊召喚！」

SATRUNの攻撃力は2800。グラフィアの攻撃力は2700。これでは勝てない。

「なら、カードを二枚セットしてターンエンド。」

平

7000 手札一枚

SATRUN セットカード二枚

達也

2400 手札三枚

グラフィア セットカード二枚

「さて、僕のターンだ。」



**The big SATRUN (後書き)**

平君のデッキよくわからないですね。自分でもわかりません。

プラネットシリーズを持つことは……（前書き）

今回は少し短くなりました。

プラネットシリーズを持つことは……

「ドロー。」

「僕は、SATRUNの効果発動。」

SATRUNには、もう一つの効果があったのか!?

「手札を一枚捨て、1000ライフ払う。そして、SATRUNの攻撃力は1000ポイントアップする。」

攻撃力3800だと……。

「バトルフェイズ! SATRUNでグラフィアに攻撃!」

「ぐっ……」

「僕はこれでターンエンドだ。」

これに賭ける!

「エンド前に魔法発動。終焉の焰! 黒焔トークン二体を特殊召喚!」

次のターン、SUNをだせば攻撃力はSATRUNを上回る。さらに、もし破壊されても復活できる。

「俺のターン。ドロー。」

「黒焔トークン二体をリリースして、The supremacy

「SUNを召喚！」

デッキ40枚の中に、一枚しか入ってないのに毎デュエル引くという、積込疑惑のあるカードだ。けっして、俺が積込んだわけではない。……マジで。

「やっと出たね。SUN。」

「俺は、SUNでSATRUNを攻撃！」

そんなことをしていると、俺の結構後ろにあかりが来た。

「（ふう、やっとあかりさんが来たよ。）ほんとにいいのかい？」

「ああ。SATRUNが破壊されなくなければ、ネクロ・ガードナ  
ーの効果を使えよ！」

「いや、使わない。」

SUNがSATRUNを破壊した余波が平……だったか？を襲う。

「俺は、カードをさらに一枚セットしてターンエンドだ。」

平

5800 手札一枚

セットカード二枚

達也

1300 手札三枚

SUN セットカード二枚

「僕のターンだ。ドロ。」

「そろそろ、デュエルを終わらせるとするか……」

何だって！？このターンで決着をつけるのか！？

「僕は、闇・道化師のペーテンを召喚。」

攻撃力500のモンスターだ。たしか、効果は墓地へ送られた時、このカードを墓地から除外し、手札・デッキから闇・道化師のペーテンを特殊召喚する……だった気がする。

「そんな、カードでどうするんだ？」

「僕は、ペーテンでSUNを攻撃。」

！？何故だ？

「ぐっ……。」

平が喘ぐ。

「ペーテンの効果発動。墓地から除外し、新たなペーテンを特殊召喚！そして、もう一度攻撃！」

これで、平の残りライフポイントは800だ。

「なにがしたいんだ？」

「フツ……さらにペーテンの効果発動！そして、SUNに攻撃！」  
これじゃ、奴の負けじゃないか！

800 - 2500〃 - 1700

デュエルがきまった。だが、それを見ていた人も平が何をしたかったのかがわかっていないみたいだ。そのまま、SUNが闇みたいなものを吸収し、The big SATRUNは俺のものになった。

「あいつ……最後まで何を伏せていたんだ？」

俺は、平のもとに行つて、セットカードを確認した。

リミッター解除      奈落の落とし穴

……これは、たしか最初から伏せてあったカード……。ということ  
は、SATRUNの攻撃の時にリミッター解除を使えば、こいつの  
勝ちだったじゃないか！

「どづして……。」「

「フツ……どっちにしろ僕にはプラネットシリーズは集められな  
いしね。」「

「どづいことだ？」

「僕には、プラネットシリーズの力を抑えきれないんだよ。持てて一枚だ。」

俺もそんな力を抑えきれないのだが……

「君の持つてるSUNの影響じゃないかな？あれは、僕のSATR UNを回収する時もなにかしていたじゃないか。」

……私には、他のプラネットシリーズを無力化することができる。……

ほんとかよ……

「そういうことなら、佐藤君に勝つとけばよかったなあ。」

……危なかった……。ほんとなら、俺は二枚しか集められずに負けてしまうところだったってことが……。

「そんなことより、いいのかな？精霊が見えない他のプラネットシリーズ使いが自我を失ってデュエルを挑んでくるかもよ？」

俺が振り返ると……

そこには、明らかにおかしいな雰囲気の人が出た。

辰哉の時と同じような黒いオーラをまとっていた。

それは俺達が「あかり」と呼んでいた人だった。

「デュエル……。」

何故、俺のまわりにはいつもプラネットシリーズ使いが多いのだから。

「いいぜ。やるじ。」

「決闘！」

プラネットシリーズを持つことは……（後書き）

連続でデュエルです。説明は次回……？

## The grand JUPITER (前書き)

説明をする、と前回言っておきながら、説明できませんでした。

すいません。

## The grand JUPITER

勢いでデュエルを始めたが、いまいち状況がよくわからない。

平はあかりがプラネットシリーズを持っていたことを知っていたようだし、しかも、こいつはそれを見るためだけにプラネットシリーズを渡してまで、俺に負けたようにも思える。

しかも、黒いオーラが辰哉の時よりも多くなっているように見える。

……考えても始まらないか。

「俺のターン。ドロー。」

……やっぱり初手にきたか。

「俺は手札からフィールド魔法、死皇帝の陵墓を発動。ライフを2000払って、SUNを召喚！」

最初からSUNが出せると頼もしい。

さらに、黒いフィールドが展開された。

「カードを一枚セットして、ターンエンド。」

「私のターン……。ドロー。」

ねえ、なんで口調変わってるの！？辰哉の時にも思ったけど、一人称も変わってるから、怖い……。

「私は魔法発動……。サイクロン。セットカードを破壊。」

「なら、チェーンして終焉の焰を発動、黒焰トークンを二体特殊召喚。」

「では、モンスター一体をセット……。さらに、カードを一枚セットしターンエンド。」

クリボーデッキなら、あのセットモンスターはキラール・トマトか？

達也

6000 手札三枚

SUN 黒焰トークン二体 死皇帝の陵墓

あかり

8000 手札三枚

セットモンスター一体 セットカード一枚

「俺のターン。ドロ。」

「俺は、黒焰トークン二体をリリースして、墮天使アスモデュウスをアドバンス召喚！」

攻撃力3000のモンスターが二体並んだ。セットできるカードが無いのがいたい……。。

「アスモデュウスの効果を発動し、デッキから墮天使スペルビアを

墓地へ送る。」

「さらに、俺はSUNでセットモンスターを攻撃！」

コーリング・ノヴァ

コーリング・ノヴァだって？それが、クリボーデッキに入るのか？  
たしかに、クリボンは出せるが……。

「私はデッキからコーリング・ノヴァを特殊召喚……。」

「なら、さらにアスモデュウスで攻撃！」

「私はデッキからオネストを特殊召喚……。」

オネスト……あかりのデッキには絶対に入らないだろう。

とすると、あれはあかりの新しいデッキか。

「俺はターンエンドだ。」

「さらに、私のターン……。ドロー。」

「私はオネストの効果を発動……。オネストを手札に戻す。そして、  
ライフを2000払い、降臨せよ、The grand JUPI  
TER！」

The grand JUPITER

レベル8 攻撃力2500/守備力2000

プラネットシリーズ……。胸のあたりに、木星があるモンスターだ。禍々しさは、SUNに勝るとも劣らない。

「JUPITERの効果発動……。ターンに一度、手札を二枚捨てることで相手モンスターをこのモンスターに装備し、その分攻撃力をアップさせる。私は墮天使アスモデュウスを装備し、攻撃力を3000アップさせる。」

攻撃力5500……。しかも、アスモデュウスが奪われた。プラネットシリーズとしては、SUNを奪いたかったのだろうが、アスモデュウスは破壊され墓地へ送られると、効果破壊されないアスモトークンと、戦闘破壊されないデュウストーンが出てくる。それは厄介だろう。

「私はJUPITERでSUNを攻撃……。」

「ぐっ……。」

「私はターンエンド……。」

JUPITERか。召喚時に神の警告や奈落の落とし穴を発動できなかったのがつらい。

達也

3500 手札三枚

死皇帝の陵墓

あかり

6000 手札二枚

JUPITER セットカード一枚

「俺のターン。ドロー。」

「俺は、スタンバイフェイズに手札を一枚捨て、墓地からSUNを特殊召喚！さらに、手札から魔法発動。サイクロン。アスモデュウスを破壊！」

「さらに、アスモデュウスの効果を発動し、トークン二体を特殊召喚。さらに、その二体をリリースして、アテナを召喚！」

「SUNでJUPITERを攻撃！さらに、アテナでダイレクトアタック！」

SUNの黒い光線がJUPITERを覆い、その上でアテナがあかりに向かって攻撃した。

「俺は、ターンエンド。」

「私のターン……。ドロー。」

「私はセットされていた魔法発動……。神の居城 ヴアルハラ。手札から、マスター・フュペリオンを特殊召喚。」

「その時、アテナの効果が発動し600ダメージを与える。」

ただ、微々たるダメージだ。

「マスター・ヒュペリオンの効果発動……。墓地から、コーリング・ノヴァを除外して、アテナを破壊。」

だが、今のままではあかりはSUNを破壊できない。

「私は死皇帝の陵墓の効果発動……。。」

死皇帝の陵墓はフィールド魔法のため、相手も効果が使える。

「ライフポイントを2000払う……。降臨せよ、The spl  
endid VENUS!」

とてもふつくしい女の天使が雲の狭間から光を帯びながら降臨する。

つつか、二体目だと!?

だから、黒いオーラが多かったのか……。

だが、攻撃力は2800。まだSUNの攻撃力は越えられていない。

「私は魔法発動……。死者蘇生。墓地から、The grand  
JUPITERを特殊召喚!」

二体のプラネットシリーズが並んだ。だが、三体モンスターが並んだところで攻撃力が3000を越えてるモンスターはいない。

「私は、マスター・ヒュペリオンでSUNを攻撃……。。」

「なっ……、攻撃力はこっちの方が上じゃないのか？」

「VENUSがフィールド上に存在する限り、天使族以外の攻撃力と守備力は500ポイントダウンする……。」

なんだって……

「さらに、JUPITERでダイレクトアタック！」

JUPITERが俺に迫ってきたと思ったら、その時には俺は10mくらい吹っ飛ばされていた。

「とどめ……。VENUSでダイレクトアタック！」

VENUSの体中から光が放出され、俺はその光に包まれた。

俺は、  
負けた。



**The grand JUPITER (後書き)**

主人公負けましたけど、別に、これで終わりってわけじゃないです。  
これからも、よろしくお願いします。

## <設定>(前書き)

割り込み投稿の、第1章の世界観とキャラクター設定です。ただ、これは章末ごとにやるものなので、第2章の話が進んでも更新しません。

## < 設定 >

この物語の設定です。

一応、第1章までの設定になっています。

## 世界観

場所は現代日本。デュエルはこっちより流行ってるが、デュエルアカデミアが造られるほどではない。ライフポイントは8000。この世界はプラネットシリーズが元々あった、十二個の異世界とは、また別の世界である。ここで、主人公の佐藤達也が、SUNを手にする事で物語が始まる。

## キャラクター設定

佐藤達也

15歳 男

この物語の主人公。デュエルクオリティは微妙。

性格は……「性格なんてねえよ by 本人」……とは言っても、普通の人間じゃない。うん、絶対。こいつはまともじゃない。

友人関係

高橋智則

大林あかり

竹下辰哉

（えっ？少ない？なら、

）辰哉とのデュエルを見ていた人のほとんど

使用デッキ

堕天使

ヴェルズ

代償ガジェット

ジャンクドッペル

暗黒界

高橋智則

16歳 男

達也の幼馴染。デュエルクオリティは不明。

性格はいい……。はず……。つつか、プロローグにしか出てないから、よく分からない。

友人関係

佐藤達也

あとは、学校の友達でもいるんじゃない？

使用デッキ

不明

竹下辰哉

15歳 男

達也の友人。デュエルクオリティは高いが、MERCURYに操られていた時はMERCURYのデッキ構成で、さらに、事故を起こしていた。また、恭輔戦では徹底的にメタられたために負けてしまった。性格は悪くない。少なくとも、達也よりはいい。

友人関係

佐藤達也 大林あかり 竹下奈津美 (え? やっぱり少ない

?なら、) 達也とのデュエルを見ていた人のほとんど

使用デッキ

エーリアン 昆虫装機

大林あかり

16歳 女

達也の友人。デュエルクオリティは……クリボーで連戦連勝なんだから、いいに決まってるだろ!?

性格は、そこまで良くないはずなのに、残念な立ち位置故、美化されている。

友人関係

佐藤達也 竹下辰哉 クラスメイトの全員

使用デッキ

クリボー ヴァルハラ天使（達也の墮天使と対にしている）

平恭輔

15歳 男

いきなり現れたよく分からない人。デュエルクオリティは高い。  
おせっかい焼き。「悪い人じゃないはず…… by達也」らしい。

友人関係

永澤咲

使用デッキ

???? 自爆デッキ

永澤咲

15歳 女

恭輔同様、いきなり現れた人。デュエルクオリティは高いのに、達也の代償ガジェットに1キルされた。

恭輔の傍にいつもいるらしい（真偽不明）。

友人関係

平恭輔

使用デッキ

次元スキドレ

竹下奈津美  
14歳 女

辰哉に一目惚れをした人。二回しか出てないから、デュエルクオリティと性格は分からない。スカーレット・ノヴァ・ドラゴンだけ出して、迷惑かけてから帰っていった。

友人関係

竹下辰哉

使用デッキ

ラヴァル

SUN

?歳 性別不明

達也の初めてのプラネットシリーズ。いいやつ。  
アストラルみたいな立ち位置になってきた。

使用デッキ

SUNを出すデッキ

新たな一歩（前書き）

第2章に入りました！

## 新たな一歩

### デュエル決着前

恭輔 side

とうとう、デュエルが始まったね。

あかりさんは地区大会の時点でプラネットシリーズを二枚持っていた。大会中に二人のプラネットシリーズ使いとデュエルするのは、不幸としか言いようがないけど。

……むしろ、僕が気になるのは、あかりさんは一回戦ではプラネットシリーズを一枚も持っていなかったはずなのに、僕に負けたときには二枚のプラネットシリーズを持っていたこと。プラネットシリーズ同士のデュエルじゃないと、相手のプラネットシリーズは回収できないはずなのに。

と、すると、大会中にプラネットシリーズを譲り受けたか、プラネットシリーズの特性が変化して、普通の人とのデュエルでも持ち主がかわるようになったか、だね。

プラネットシリーズの特性が変化したんだとすると、面倒だけど……

お、そろそろ、決着がつくみたいだ。

「とどめ……。VENUSでダイレクトアタック！」

白い光があたりを包みこむ。

あかりさんの勝ちだ。

プラネットシリーズは全部で9種類、ここにはその内5種類、つまり半分以上を集めたあかりさんがいる。そうすれば、互いに引き合った、プラネットシリーズを保有する世界に移動することができるはずだ。少なくとも、あの人は言っていた。プラネットシリーズのこととは言っていなかったけど、プラネットシリーズを手にしたことがある、今ならわかる！

これで、十二異世界のどこかに行ってしまった父さんに会える……！

「咲、飛び込むよ！」

「わかりました。……っ！別の世界！？」

「なんだって!?!」

佐藤君や、あかりさんとは別の次元の裂け目が僕達の近くにできていた。このままでは、彼らとは別の次元に飛んでしまう！同じ十二異世界とはいっても、交わるのは少ないだろう。

「ぐっ……!?!」

「ただ、僕らの抵抗も虚しく、僕らは佐藤君達とは別の異世界へ飛んでしまった。」

「?」

達也 side

「……ここは、どこだ……?」

俺が目を開けると、そこには……

綺麗なシャンデリア

白いベッド

日が差し込む明るいベランダ

などといった、高級ホテルの一室だった。

「そうか……、確か、俺はプラネットシリーズに取り憑かれていた  
あかりに負けて……」

その後白い光に包まれて……気を失って……

で、なんでここにいるんだ???

俺は、とりあえずベランダに出て外を見る。下には、デュエルしている人が幾らかいて、たまにK・Cとかかれた車を通る。空に、浮かんでいるバルーンには、デュエルアカデミアの写真が。

「……そうだっ！SUNは!?!」

俺はデッキケースを確認する。デッキ枚数は39枚だった。そのなかには、SUNは無かった。だれかとトレードするために持っていた、ファイルにも、MERCURYは無かった。

「……もちろん、SATRUNも無いよな……。」

ずっと、握っていたはずのSATRUNも既に、無かった。

「で、何で俺はここにいるんだ？」

そういえば、さっき外を見たら海馬コーポレーションとか、デュエルアカデミアの写真とかがあった気が……

「そんなことはないよな。」

俺は、もう一度外をしてみる。下には、デュエルしている人が幾らかいて、たまにK・Cとかかれた車が通る。空に、浮かんでいるバルーンには、デュエルアカデミアの写真が。

……！？

さらに、もう一度見てみる。下には、デュエルしている人が幾らかいて、たまにK・Cとかかれた車が通る。空に、浮かんでいるバルーンには、デュエルアカデミアの写真が。

おお。

「ここは、アニメかマンガの遊戯王の世界なのか……？」

あとで考えてみると、俺はこの時何故ここまで冷静だったのかわからない。普通なら、狂ってもおかしくないのに。やはり、プラネットシリーズと関わったことが大きいのか。

そういえば、SUNの前に、

……プラネットシリーズは本来この世界には存在しなかった。しかし、何者かの力によって新たな12個の異世界が生まれ、その

世界達とこの世界がぶつかったことにより、その世界にあったプラネットシリーズの一部がこの世界にやってきてしまったのだ。まあ、こう言う私もプラネットシリーズの一枚だがな……

と、言っていたような気がする。

確かに、「12個の異世界」という設定は、遊戯王GXの設定だが……

となると、ここは遊戯王GXの世界ということでもいいのか？

デッキは大会用（出ないけど）に、たくさん持ってきていたし、カードファイルだって持っている。だが、他には何も無い。

……ま、いつか。ここじゃデュエルで勝てば、犯罪も許される世界だし。

つつか、ここに居ていいのかな。とりあえず、出るか。鍵っぱいのも持ってないから、ばれると拙いしねえ。

「だれだ！どうして中に入れたんだ！」

出ようと思ったけど、捕まっちゃた。なんでも、ここは、海馬コーポレーションが造った、要人用のホテルらしくて。最悪のところだったらしい。

だが、俺には、相手の言葉を無視して強制的にデュエルさせる、遊星のあの台詞がある！

「おい、デュエルしろよ。」

言えた……！平の時にも言ったけど。

「……いいだろう。お前が勝ったなら逃がしてやる。」

……マジかよ……。本当に通用すると、ゾクッとするよな。

「「決闘!!」「」

10分後

「勝った……。なんか、可哀相……。」

少なくとも、モリンフェンを三体並べられて負けるのは屈辱だろう。ちなみに、エクシーズやシンクロは使っていない。危ないし。

「じゃ、じゃあ、帰っていいですね。」

どこに帰るんだよ……。

「ちょっと待て……。モリンフェンを三体並べるとは、かなりのデュエルタクティクスを見た。海馬社長をお呼びする。」

……俺は、海馬社長を呼びたい時に呼べる人をモリンフェンで倒したのか。

1時間後

俺は、この1時間かなりよくしてもらった。住所不定、どうやって入ったかもわからない人をここまでしてもらうなんて……デュエルはここじゃ絶対だな。

などと思っていると、あの人が出てきた。

海馬社長だ！

「どうした、何があったのだ。」

「それが……この少年、モリンフェンを三体も並べて私に勝ったのです！」

「何だと！」

うん、皆驚くよね。もといた世界では、夢だったし。

「名前はなんというっ？」

「佐藤達也です。」

「そうか、達也、デュエルしろ。コイツを倒した実力を見せてみる！」

こうなるよね。でも、やってみたかったんだ！

「光栄です。では、やりましょうか。」

「「決闘!!」」

## 新たな一歩（後書き）

いきなりの急展開です。

ちなみに、プラネットシリーズは10枚ありますが、彼らは9枚だ  
と思い込んでいます。

あと、GXの原作に少し介入しますが、GXのストーリーの途中か  
らです。平君の行った、12個の世界の内、一つに接触しないとい  
けないので、少なくとも異世界編まではやります。

GXを確認しながら書くので、更新が遅くなります。すいません。

V S 社長（前書き）

今回も説明っぽいのがメインです。

デュエルはイベントっぽくなりました。

V S 社長

???

辰哉 side

「ここは……何処だ……？」

そう言いながら、目の前のビルを見ると、そこにはK・C・と書いてあった。

これは……

「これはダメだろー！」

あかり side

「ここは、何処……？それに、あたしは何をしていたの……？」

12個の世界の内の一つの世界

恭輔 side

「ちつ……ちよつと失敗しちゃったな……。大丈夫かい？咲。」

「私は大丈夫……。」

よかった、咲がいて。いなくなっていたら、どうしようかと思っ  
たよ。

ここはどこだろう。綺麗だけど、少なくとも歴代の主人公のいる世  
界じゃないな。

「おい、金を出せ！」

「やだよう、だれか助けてえ〜〜〜！」

男の子が苛められている。つつか、あんな子供をカツアゲするなんて、どんな人外だよ……。

「ふう、助けるか。」

「恭輔君もおせっかいですね……。」

いや、やることがないだけなんだ。

「おい、そんな小さな男の子苛めるなよ。」

「なんだと？この俺、暗黒界の斥候スカーになんかようか!？」

……………人外だった。

「じゃあ、デュエルで決着つけようぜ。」

ホテル

達也 side

「まずは、俺のターンだ！」

なっ……言ったもの勝ちだと！？さっきは、俺が先攻取ったから気付かなかったけど。

「俺は、手札から古のルールを発動。手札から、現れよ！青眼の白龍！！！」

いきなり、ブルーアイズを出された。この世界ではライフポイントは4000。攻撃力3000のモンスターはかなり強い。

「俺はターンエンドだ！」

セットカードは無しですか、そうですか。

じゃあ、勝たせてもらうね。もうちょっとデュエルしたかったけど、海馬社長の神引きで、滅びの爆裂疾風弾からの融合で青眼の究極龍出されたら、負けるんで。

「俺のターン。ドロー。」

「俺は、手札から魔法発動。六武の門！さらに、真六武衆 カゲキ

を召喚します。これにより、六武の門にカウンターが二つ乗り、さらにカゲキの効果発動。手札から、真六武衆―ミスホを特殊召喚します！さらにカウンターが二つ乗ります。」

「攻撃力200と1600のモンスターか。いくら並べてもブルーアイスには勝てんぞ！」

「いえ、カゲキは他の六武衆が存在する時、攻撃力が1500ポイントアップします！」

「そして、自分フィールド上に真六武衆 ミスホが存在する時に、手札から真六武衆 シナイを特殊召喚します。そして、六武の門にカウンターが二つ乗ります。」

「攻撃力の低いモンスターをちまちまと並べおって……」

「六武の門のカウンターを四つ取り除き、デッキから真六武衆 キザンを手札に加え、さらに、自分フィールド上にキザン以外の六武衆が存在する時、手札から特殊召喚します！」

侍がたくさん並ぶと案外、気持ちいいな。

「これにより、六武の門にカウンターが二つ乗ります。キザンは自分フィールド上に他の六武衆が二種類以上いる場合、攻撃・守備力が300ポイントアップします。」

「さらに、カウンターを四つ取り除き、デッキから新たなキザンを手札に加え、特殊召喚します。そして、攻撃・守備力が300ポイントアップ！」

「そして、カウンターが二つ乗るのか……。だが、まだブルーアイズの攻撃力は越えられんぞ！」

ミズホの効果で、いまずぐ除去することもできるんだが……。俺は、あえてこうするぜ！

「六武の門のカウンターを二つ取り除く事でキザンの攻撃力を50ポイントアップさせます。さらに、装備魔法、団結の力を攻撃力をアップさせたキザンに装備させます！これにより、キザンの攻撃力は自分フィールド上のモンスターの数×800ポイントアップし、6600になります！」

「攻撃力6600だと……」

「攻撃力6600のキザンで、青眼の白龍を攻撃！さらに、他の真六武衆でダイレクトアタック！」

「ぐっ……ブルーアイズがあああああああ！……！」

4000 - 3600 - 1700 - 1600 - 1500 - 2100 =  
- 6500

「俺の勝ちですね。これでいいですか？」

まわりでは、「社長を1ターンキルだつて……！」や、「あいつ……何者だ！？」などと話している社員がいる。

俺、あんまり1ターンキル好きじゃないんだよなあ……。つつか、

何でこの世界では1ターンキルが凄いことのように言われているの？ライフ4000だから、先に展開すればいいだけじゃん。

「……ちつ、負けたか……。」

なんか、凄いへこんでる……。一応、俺は中学三年だから、そんな人に負けると悔しいんだな……。

「貴様、強いな。我が海馬コーポレーションに入る気はないか？」

いえ、ありません。

「すみません、その気はありません。ちなみに、デュエルアカデミアに遊城十代って生徒いますか？ちなみに、何年生ですか？」

「ん、そうか、わかった。おい、お前調べろ！」

「はい、います。現在三年生です。」

俺がこの世界に来たということは、近くにいたあかりや辰哉、平や永澤さんもこの世界に来てる可能性が高い。そして、この世界は12個に分かれているため、その何処にいるかも分からない。ということは、他の異世界と接触する、デュエルアカデミアにいたほうがいい。今はまだコブラが来ている時期だのため、もうすぐだ。

「何故聞くんだ？そこに入りたいのか？」

「はい、ですが、金も家もないので……。」

特待生になりたいなあ。

「いや、いいだろう。おい、こいつを特待生にしろ！」

おお、凄い。つか、海馬社長の独断なんだな。

「わかりました。何歳ですか？」

そりゃ、十代と同期の方が原作にたくさん介入できて、いろいろな場所に行けるから、いいよね。

「18歳です。」

「貴様、結構背が低いな。中学生くらいだと思ったが……。」

うん、当たり前だ。だって今15歳だから。

「では、アカデミアに手紙を出しておこう。」

「ありがとうございます。」

こうして、俺の高校生活と、友達を探す旅が始まった。

V S 社長（後書き）

ということ、デュエルアカデミアへの入学は、三年生からになりました。別に、こっちがメインになるわけではないと思いますので。

## デス・デュエル開幕！

### デュエルアカデミア

「ふう、着いた。ここが、デュエルアカデミアか。案外大きいな。」  
テレビで見るよりずっと大きい。

……だが、これからすることに、気が重くなる。あの時は異世界に行ける！と、短絡的に思ったがそれは、コブラのデス・デュエルの結末をアニメ通りにしなければいけないということだ。アニメの事は、かなり昔に見たため、詳しく覚えてないが、異世界に行くほどのエネルギーを生んでしまうようなことが起こるのは確実だろう。どうすればいいか……。

でも、俺に何ができる？デス・デュエルを止めさせることは俺一人の力ではできないし、ちょうどよく調節することもできない。

俺には、何もできない。

「その時に考えるか……くそっ！」

今のところ、助けられるときに助ける、事しかできない。

「っ！あれは、鮫島校長！」

少し先に、校長の姿が見える。

「こんにちは。」

「おお、君が佐藤君か。海馬社長から話は聞いてるよ。」

「ありがとうございます、こんな急な申し出を。」

最初からそれを狙ってたんだよな、俺は……

「いや、大丈夫だ。デュエルが好きなら、私たちはいつでも受け入れるよ。それに、今年は編入生もいるからね。」

ヨハン、アモン、ジム、オブライエンのことか。

……それにしても、鮫島校長って結構いい人だよな。出番あまりないけど。

「では、行こうか。」

「あ、ちょっと待って下さい!」

あそこにいるのは、ヨハンと十代じゃないか？

「ん？わかったが……」

「お〜い！」

「ん？だれだ？」

「こんにちはは、俺は新しい編入生だ。いきなりだけど、挨拶をしようと思っただけな。」

そりゃ、会ってみたいよな。

「おお！そうか！俺は遊城十代だ、よろしくな！」

こいつ、ノリいいな！

「俺は、ヨハン・アンデルセン。新入生だ。よろしく。」

お前は新入生じゃないだろう、ノース校代表。まあ、いつか。

「じゃあ、もうすぐ始業式が始まるから、俺は行くな！お前らも急げよ！」

まあ、ヨハンが遅れることはわかってるがな。

「「おお、わかったぜ！！」「」

よくハモるなあ。

## 始業式

「宣誓

」

ん？何で宣誓のところダッシュで略されているかって？それは、俺が宣誓なんか聞く気が無いからだ。

「さて、本年度、生徒たちの能力向上を願い、新しい生徒を迎え入れることにした。」

俺のことか？それとも、各校主席のことか？と思っていると、アモンたちが出て行った。俺は、もう少し後か。

「そして、もう一人紹介しよう。今年特別講師として、ウエスト校から赴任した、プロフェッサー・コブラ！」

こいつが今年の波乱の元……

「さらに、海馬社長の推薦で、新しい生徒が入ってきた。佐藤達也！」

俺の出番か。さっきまでは、なにが起こるか分かってるからあまり話を聞いてなかったしな。

「こんにちは。佐藤達也です。」

「彼は、あの海馬社長を1ターンキルしたとして、この学校に推薦された。」

「鮫島校長……コブラが……」

コブラがエキシビジョンマッチをしたいようで（俺は知ってるから、この説明なんかおかしいよな）、鮫島校長を見ている。

「おお、そうか。では、コブラ君言ってみたまえ。」

っ！よかった。コブラをなんとなく呼び捨てにしたことはスルーしてもらった。これからも、呼び捨てでいいや。

「では、これから、エキシビジョンマッチを行う。」

皆がざわつき、クロノス教諭も驚いている。まあ、知らなかったんだもんなあ。

「対戦者は……ヨハン・アンデルセンと遊城十代！」

「二人とも、右手を前に。」

二人の腕にデスベルトがつけられた。ここで止めることもできるが……まだ、交友関係がない俺では味方ができず、潰されてしまうだろう。

「では、一時間後にデュエルを行う。」

「いけ！エアール・ネオス！」

「よみがえれ！レインボー・ドラゴン！」

ハッターだ……

「なんちゃって。」

おい、原作知ってるこっちから見ると、二度目は寒いだけだぞ……

パチパチパチパチ

コブラの登場か……

「生徒諸君、勇気ある二人のデュエルに拍手！」

「いい開幕戦だった。」

開幕戦、という言葉に皆驚く。

「これから、デスクロージャー・デュエルを開幕する！」

### 校長室

「では、佐藤君。君はどの寮に入るかね？」

「選べるんですか!？」

ビックリだ……

「ああ、海馬社長から君は強いのでどの寮に入ってもいい、との連絡があった。」

「じゃあ、レッド寮で。」

当たり前だ。主人公に折角声をかけられたんだから、友達になっておいた方がいい。

「本当にいいのかね？君の実力ならブルーがいいと言っていたが……」

「いえ、いいです。それに……校長だってその方がいいんじゃないですか？」

「どづいづことだい？」

「つまり、俺のような不確定要素があった方が、彼の成長に繋がりやすいんじゃないかと思っただんです。」

「君は……」

もう話すことはない。

「じゃあ、俺はレッド寮に行きますね。」

## レッド寮

「おっじゃまします!」

最初のイメージが肝心だ。ずっとこのテンションでやる気ないけど。つつか、多分明日には止めてると思うけど。

「ん?だれだ?」

「今日からレッド寮に入ることになった佐藤達也だ。よろしく。」

「おお、お前か!よろしく!」

「今、パック開けてるのか?」

「ああ。おっ、レアカードだ、ヨハン!」

そういえば、何でヨハンここにいるんだ？まあ、いつか。

「俺も当たったぞ！」

どれどれ……

ダーク・カタパルター

……見なかったことにしよう……。たしかに、字の部分が銀のカードは公式ではレアカードという扱いだ、それは全てのパックに入ってるだろ……。

「それより、お前らあれ止めなくていいのか……」

俺が指差したのは、ハネクリボーとルビー・カーバンクル。何故か喧嘩をしていた。

「お前、精霊が見えるのか!？」

見えますから、二人で迫ってくるのは止めて下さい。

「じゃあ、精霊のカードは持ってるのか？」

そう聞かれて思い出すのは、SUNだ。あかりが持ってるから、安全だろうけど……、あいつは他のプラネットシリーズを無力化できたよな。ということは、あかりも安全だ。

「わりイ、嫌なこと思い出させたか？」

「いや、大丈夫だ。」

俺のこと気にするなら、とりあえずあの喧嘩をとめる。

「今は持ってない。昔は……………」

「どづした？」

俺はドアを指差す。

「だれがいる！」

「待てっ！」

どづせ見つけられないが…………オブライエンと話しておくべきだろう。

「俺も行く！」

やっぱり見つからなかった。

今日はもう寝るか。明日はデス・デュエルの説明があるし。

デス・デュエル開幕！（後書き）

TFキャラを出そうと思ったのですが……だれを出したほうがいい  
でしょうか？

一応、一人決まってるのですが……

デス・デュエル初戦！（前書き）

そろそろプラネットシリーズが関わってくる予感……

……予感はしていると思います……。

## デス・デュエル初戦！

「これから、デス・デュエルを開幕します。生徒は配布されたデス・ベルトを装着して下さい。」

アナウンスが流れる。つつか、アナウンスの声でデスを連呼するのは、なんか可笑しいぞ。

まあ、とりあえずはデュエルするか。

誰がいるかな……

「あの……デュエルして貰えませんか？」

誰だ？俺は、社長を1キルしたことで、ほとんどの人からデュエルを挑まれないと思っていたのだが……

「僕、空野 大吾っていいます！先輩、海馬社長を倒したらいいですね。だから、デュエルしたくなって！」

空野大吾……ミスターTの闇にデュエルアカデミアで初めて捕らわれた男か。相手のデッキを研究する、三沢タイプだったはずだが、俺のデッキは知っているのか？

そういえば、俺まだ三沢エアーマンに会ってないな。剣山や翔には、朝会ったけど。

……俺、何で二歳も年上から先輩って呼ばれたのに動じなかったんだ？

「いいぜ。やるう。」

「決闘！！」

「まずは僕のターン。ドロー。」

「僕は、ホルスの黒炎竜Lv4を召喚！さらに、カードを二枚セツトしてターンエンドです。」

ホルステッキか……十代の時と同じだな。確かにこの世界では、かなりメタできるだろう。

「俺のターン。ドロー。」

「俺は、ローンファイア・ブロッサムを召喚。さらに、効果を発動。このカードをリリースし、デッキから椿姫ティタニアルを特殊召喚！」

「いきなり、攻撃力2800のモンスターを特殊召喚ですって！？」

「バトル！椿姫ティタニアルで、ホルスの黒炎竜に攻撃！」

「甘いですよ、先輩！セットカード発動、月の書！椿姫ティタニアルを裏側守備にします。」

椿姫ティタニアルの守備力は2600。次のターン、空野がレベル

アップ！を引いても椿姫ティタニアルは破壊されない。

っつか、こういう単純な思考はアニメ見てておかしいだろ、って思ったんだけど、いざこの世界の人とデュエルするところという思考になるよな。前いた世界では、こんな単純じゃなかったんだが……

「俺は、カードを三枚セットしてターンエンドだ。」

三枚セット、と聞くと、案外ガン伏せに聞こえるが、この世界では俺は神の警告は抜いている。なぜなら、ライフが4000のため一枚使ってもライフが半分減り、ここでは規制の掛かっていない神の宣告の方がデッキに入るのだ。まあ、俺のセットカードの中に神の宣告は無いけど。

空野

4000 手札三枚

ホルスの黒炎竜Lv4 セットカード二枚

達也

4000 手札二枚

セットモンスター一体 セットカード三枚

「そんなにセットするんですか……、僕のターン、ドロー。」

そんなビクビクしたふりを見せるなよ。どうせ王宮のお触れを伏せてあるんだろ。まあ、まずは発動しとくか。

「俺はセットされていた魔法発動、手札断札！お互いは手札を二枚

捨てて、二枚ドローする！」

俺が捨てたのは、ギガプラントとダンディライオンだ。

「墓地へ送られたダンディライオンの効果発動。綿毛トークンを二体特殊召喚！」

「そうですね……。僕は、ホルスの黒炎竜Lv4をリリースしてホルスの黒炎竜Lv6を召喚します。さらに、セットされていた罫、王宮のお触れを発動。罫カードの効果は全て無効になります！」

やっぱりお触れあつたじゃん。これから発動する、レベルアップ！をカウンター罫で無効化されないためか？

「僕は魔法発動、レベルアップ！ホルスの黒炎竜Lv6をレベルアップさせて、ホルスの黒炎竜Lv8にします！」

きたな、これで俺の魔法・罫が全て封じられた。

「ホルスの黒炎竜Lv8は魔法の効果が無効化できます。そして、王宮のお触れは全ての罫の効果が無効化されます。つまり、先輩の魔法・罫は全て使えません！」

面倒だ。植物族では、シンクロを使わなければ攻撃力3000を越えられない。まあ、だからこのタイプのデッキにしたのだが。

「僕は、ホルスの黒炎竜Lv8で裏側モンスターに攻撃！」

椿姫ティタニアルが破壊された。

「僕はこれでターンエンドです。」

「じゃあ、俺のデッキのエースを見せてやるぜ！ドロー！」

空野のセットカードは王宮のお触れを守るためのカードのはず。

「俺は、フェニキシアン・シードを召喚。さらに効果発動し、手札からフェニキシアン・クラスター・アマリリスを守備表示で特殊召喚！ターンエンドだ。」

アマリリス軸の植物デッキだ。

「そんなモンスターがエースなんですか？僕の勝ちみたいですね。」

マジで！？そんな短絡的でもいいの！？

空野

4000 手札二枚

ホルスの黒炎竜Lv8 王宮のお触れ セットカード一枚

達也

4000 手札一枚

フェニキシアン・クラスター・アマリリス 綿毛トークン二枚  
セットカード二枚

「僕のターン。ドロー。」

「僕はホルスでアマリリスに攻撃！」

かかったな。

「アマリリスが破壊された時、相手に800ポイントダメージを与える！」

「なっ！」

種の弾丸が空野を襲う。

「僕はターンエンドです。」

「じゃ、俺のターンだ。ドロー。俺はターンエンドだ。」

「先輩、何もできませんね！」

「いや……、俺はこのエンドフェイズ時に墓地のフェニキシアン・シードをゲームから除外し、アマリリスを特殊召喚！」

アマリリスの強さは、何度でも蘇ってくることさ。

「なんですって！？つまり、半永久的にダメージを与え続けられるんですか！？」

そういうことだ。

空野

3200 手札三枚

ホルスの黒炎竜Lv8

王宮のお触れ

セットカード一枚

達也

4000 手札二枚

アマリリス 綿毛トークン二体 セットカード二枚

「僕のターン、ドロ。ホルスで綿毛トークンを攻撃して、ターンエンドです……」

「俺のターン。ドロ。」

「アマリリスでホルスに攻撃！」

「お互い800ポイントのダメージですね……」

「さらに、エンドフェイズ時に墓地のダンディライオンを除外してアマリリスを特殊召喚だ。」

こうしてアマリリスの自爆特攻と蘇生によって4ターンが過ぎた。その間に、綿毛トークンは全て破壊された。

空野

800 手札五枚

ホルスの黒炎竜Lv8 王宮のお触れ セットカード一枚

達也

1600 手札四枚

アマリリス セットカード二枚

「僕のターン……」

「おいおい、デッキを信じなきゃ絶対に勝てないぞ？」

つて、十代とか遊戯とかが言ってたよ。まあ、冗談のつもりだったんだが……

「デッキを信じる………そうか、そうですね！僕のターン！ドロー！」

………本気にしていた。

そして、この後俺はデッキを信じる！なんていう戯言がこの世界だと凄い力を持っていることをおもいしることとなる。

「僕は、異次元の女戦士を召喚！」



## デス・デュエル初戦！（後書き）

初戦の相手は空野です。何をさせるか、迷ったのですがやっぱりお触れホルスになりました。

様々な動き（前書き）

決着と他の人の動向だけになっちゃいました。

## 様々な動き

「僕は、異次元の女戦士を召喚！」

マジかよ……。アマリリスの弱点は、SUNと同じく除外だ。お触れホルスではモンスター効果を無効にできないから、アマリリスで勝てると思ったんだが……

余計なことを言ってしまったな。

「バトルです！異次元の女戦士で、アマリリスを攻撃！さらに、女戦士の効果を発動してアマリリスとこのカードを除外します！」

アマリリスと女戦士が、黒い渦に飲み込まれていった。

「とどめです！ホルスの黒炎竜LV8でダイレクトアタック！」

それは、止めないとな。

「俺は、手札からバトルフェーダーを特殊召喚して、バトルフェイズを終了させる！」

危ねえ。

「そんなカードがあったんですか……。でも、次のターンで決めますよ！」

……残念だが、それはさせない。このデュエル、俺の勝ちだ。

「お前のメインフェイス2の終了時、俺はセットされていた異次元からの埋葬を発動！アマリリスを墓地に戻す！」

「ホルスの効果を忘れたんですか？異次元からの埋葬を無効にします！」

忘れるわけないだろ。つつか、ホルスからそれを取ったら、何が残るんだよ？

「その効果にチェインして、手札からエフェクト・ヴェーラーを捨て、ホルスの効果を無効にする。」

「なんですって！？手札から効果発動！？」

空野が、異次元の女戦士を引くのが遅くてよかった。俺は、さっきのターンにエフェクト・ヴェーラーを引いた。

つつか、こいつはチューナーだから使うのは拙いんじゃないか、と思っていたが、デュエルディスクでのデュエルのため、相手に確認されなければ大丈夫なのだ。ただ、十代とかとデュエルする時は十代が「俺の知らないカードだ！見せてくれよ！！！」なんていう展開もありえるため、使う気はしないが。空野も自分の知識を増やすために聞いてくるかもしれないな、速攻で逃げるか。

「ああ、そうだ。これで、ホルスの効果は無効となり、アマリリスは墓地へ戻る。」

「僕は、ターンエンドです。」

「俺のターン。ドロー。ターンエンドだ、そして、ギガプラントを

除外してアマリリスを特殊召喚。」

勝敗は、空野のドローにかかっている。

「僕のターンです。このドローで決着がつくんですね……。ドロー！」

空野は一瞬残念そうな顔をしてから、満足したような顔になった。

「僕の負けです。まだ、デッキを信じきってなかったみたいですね……。」

引きが悪かったか……。それより、何でそんな熱血キャラになるの？俺はなれないな……

「僕は、ホルスでアマリリスに攻撃。800ポイントのダメージを受けます。」

種の弾丸が空野を襲う。

俺の勝ちか。案外やばかったかも。

「あれ、体中の力が……」

バタツ、と空野が倒れこむ。俺も膝をついてしまった。

「まさか、こんな時間だったのか……。オブライエン戦はもうちょっと後だと思っていたから、安心してたのに……」

デュエルエネルギーは本気でやればやるほどぬける。それほど空野は

本気だったのだろう。それに比べて俺は……

「とりあえず、空野を運ばないと。」

俺は空野を背負って、医務室まで行った。

S A L

コブラスide

「なんだ！？この量のデュエルエネルギーは！？」

だれのデュエルかを調べる。

「空野大吾と佐藤達也か……。っ！？このほとんどのエネルギーは空野のものだと！？佐藤達也とは、何者なんだ……。っ？」

## 海馬コーポレーション

辰哉 side

「これから、入社試験を開始します。デュエルディスクを装着して下さい。」

アナウンスの声が流れる。つつか、入社試験までデュエルなんだな……。

え？俺は何をしているかって？それは、年齢を四歳位偽装して、海馬コーポレーションの入社試験を受けているんだけど？

「俺の相手は誰だ？」

「貴様の相手は俺だ。」

振り向くと、そこには海馬社長の姿が！

「（前もこのような住所不定の中学生っぽいヤツがいたから、気になったんだが、がっかりさせないでくれ。）さあ、デュエルだ！」

「俺は、燃料電池メンでダイレクトアタック！」

「ぐわあああああああ！！！！」

よかったよ。なんか、社長の嫁が出まくってて、究極龍もあわせる  
とブルーアイズを七回ぐらい潰した気がする。ごめんなさい。

それでも、俺はダメージを食らってない。なぜなら遊んでいたから。

「貴様の実力は分かった……。入社させよう。」

よし、きた。

???

咲side

今、暗黒界の斥候スカーと恭輔がデュエルしています。ただ、いきなり恭輔がソリティアし始めて……

「僕は、インフェルニティ・デーモンとインフェルニティ・ネクロマンサーにインフェルニティ・ビートルをチューニング！シンクロ召喚、氷結界の龍トリシューラ！！！」

「また、わけの分からないシンクロ召喚か………どういうものなんだ？」

「この世界では、デュエルに負けたら死ぬんでしょ？そしたら教える必要ないじゃないか。さっきの男の子はもう咲が逃がしたし。」

「なっ………！？いない！？どうして！」

「これで、シンクロ召喚を広める人はいないね。」

「くそっ……！」

「トリシューラの効果により、カードを除外したいんだけど君にはもうカードがないね。なら、三体のトリシューラでダイレクトアタックだ。」

そして、スカーは消えてしまいました。

「かなり残酷なことをしましたね……。」

「どつちにしろ、あいつは十代に殺されるだろ？たぐさんいるかも  
しれないけど。」

「まあ、あの男の子を助けられただけ……。」

「そつだよ、じゃあ行くっか。」

## マアトの羽

### 医務室

達也 side

俺は、空野を背負って医務室まで来ていた。

「彼に何をしたの？」

……そして、鮎川先生の質問攻めにあっている。十代のデュエルを見れなかった。

「俺は何もしていません！デュエルしただけです！っつか、一応僕も膝をつくぐらいはダメージをうけたんですよ！」

「私がデュエルした時には何もなかったわよ？」

万事休すだ……。

しかし、そうこうしていると、ヨハンたちが十代を背負ってやってきた。

「鮎川先生！十代が！」

「どうしたの？まあ、十代君！」

「おっ、達也、どうしたんだ？」

「俺とデュエルした、空野が倒れた……」

「俺もそうなんだ。十代とオブライエンがデュエルして、十代が倒れちゃった。」

これは、拙いな……

デュエルは、明らかに電波が弱い時だけにしよう。

「デュエルをただけでこんなになるなんて……」

「でも、本当なんです!」

「わかったわ、あなたたちはもう帰って。」

俺は完全スルーかよ。まあいいや、帰りますよ。

今日は、確かジムと会っただけ？流石についていかないと拙いな  
つつか、まずは空野を見に行かないと。十代もいるし。

「大丈夫か？空野……」

「大丈夫です、朝にはもう治りました。」

というか、空野には悪いが、あそこがめっちゃ気になる。何でこんな、朝6:00に明日香と早乙女が弁当作って十代に食べさせてるんだよ（つつか何で俺は明日香のことを呼び捨てで呼んだんだよ……）。

その後、早乙女さんと天上院さん（言い方直した。一応レイも初対面なんで。）といろんな話をした。一時間話して、ようやく名前で呼べることになった。いや、マジで苗字で呼ぶとかキツいから。

「アニキ！おはよう！」「具合はどうだドン。」

翔と剣山が来たようだ。

「達也君……、アニキは何してるの……？」

その質問はもつともだ。空野だって話せるようになったものの、あの後寝てしまったんだし。

弁当をあ勢いで食べるなんて、一番調子がいい時の俺でもできない。

「十代君、精密検査の結果が出るまで安静にしてないと。」

鮎川先生が来た。

と思っただら、十代が弁当の中身全部飲み込んだ!?!???

「…………マジかよ…………。」

「すごいっす…………アニキ…………!!」

…………翔、ビックリするのは同感だが、そんな尊敬の眼差しで見るのはちょっと…………。

「ご馳走様!おいしかったぜ!」

そうですが、そりゃおいしいよな。

…………でも、レイって確か中1だよな!?!なにその弁当のクオリティ!?!十代のためを思って、ってレベルじゃないだろ!?!

ふう、ビックリしたら疲れた。

「じゃ、俺は行くぜ!」

お前、本気でオプライエンとデュエルしたか?なんでそんなに体力残ってるんだよ。

「ちょっと、アニキ!」「アニキ、ワイルド過ぎるドン!」

俺もついていくか。

「食事の後は、やっぱり運動だな。」

俺の知識が少ないのかな？普通は運動＝デュエルじゃなかったはずだけど。

「オイ！」

ヨハンだ。

「おお、ヨハン！」

「もういいのか？」

「もう大丈夫！」

そろそろだな、カレンが出てくる。

「うわあああああ！……！」

「うわあああああああああ!!!」(俺)

そんなに驚くと、俺も驚くよ!? 声が大きすぎるんだよ!!!

カレンが剣山に噛み付いている。

「sorry sorry!!!」

「島の何処かで強烈な電磁波が発生したんだ。強い電磁波は爬虫類の闘争本能を刺激するからね。」

そうですか。それ以外ジムに言うことはない。

「はあ〜〜」

「理解しているのか?」

「いや、全然。」

なら、言うな。紛らわしい。

「look これは電磁波の計測装置だ。」

針が振り切っている。確か、そういうのって針が振り切ると壊れるんじゃないかったっけ?アニメ補正か。

「yesterday 夜中に強い電磁波が発生して、カレンが暴れだしたんだ。」

とりあえず、その中途半端な英語をどうにかしろ。

「それって、十代とオブライエンがデュエルしている時じゃ？」

「なんでそんな正確な時間が分かるんだよ？いや、アニメ補正か。」

「電磁波と十代が倒れたことに関係あるんじゃないか？」

「なんでそう思ったんだよ？いや、アニメ補正か。」

「……アニメ補正って言葉は便利だなあ。」

「まあ、森へ行くか。」

「あれ？これはなんだ？」

「俺が異変に気付いたのは森へ入って10分ぐらいたった頃だった。」

それは、明らかにプラネットシリーズのそれだった。

俺は、十代達と分かれて、それに引き寄せられるようになっている。

そこに、それはあった。

黒い羽だった。

それを拾った時点でいきなり体に負荷がかかった。

しかし、同時にSUNを持っていた時と同じ感覚を覚えた。

そして、俺はいつもこの重圧を背負ってきたんだなあ、と思いながら、それをポケットにしまった。

しまった時点で、俺に声が聞こえた。

……マートの羽……

俺は、それをマートの羽と名付けた。

俺が、十代達に追いついた時、ジムと剣山のデュエルはもうほとん

ど終わりになっていた。

「魔法カード！化石融合フォシルフュージョンを発動！古生代化石竜スカルギオス！」

「ラストバトルだ！」

「うわあああああ！……！」

決着が着いた。ということは……

「What?」

二人のデス・ベルトから、デュエルエネルギーが飛び出す。

「なんか……全身から力が抜けたドン……！」

そして、二人とも倒れてしまった。

……「ごめん。何もできない……。」

「くそっ……！」

流石に、何度も倒れるのを見せられるのは、我慢できない。

だが、俺にはSALを突破できないだろう。それほどの力は無い。

「どっすねば……！」

だが、俺達はそのままジムと剣山を連れて戻った。

## マアトの羽（後書き）

マアトの羽の色は自分で考えました。

つつか、実体化してるのかも分かりません。

この作品では、実体化している設定です。

## コブラの刺客（前書き）

原作介入ができない主人公……。

## コブラの刺客

「鮎川先生……今度はジムと剣山がッ……!!」

「何ですって!?!」

気を失っているジムと剣山を見て、鮎川先生が驚いている。まあ、そりゃそうだよな。

……見て見ぬフリをしている俺が言えることではないが。

「今日は……止めるべきか……?」

「ん?どうしたんだ?達也。」

俺は、声を出していたことにも気付かなかったようだ。

「いや、何でもない……。」

「そつか、わかった。」

ここにいても仕方ない。十代達が、デス・デュエルの陰謀について話すだけだ。

俺は、そのまま学園を出て歩くことにした。ヤバいことが起こるフラグ立ってるじゃん……、なんてことは俺はまだ気付いていなかった。

「玄関のあたりには人がたくさんいたのに、ここには誰もいなかったな……。」

そのまま、薄暗い森の中に入っていった。

「冬だから、やっぱり寒いなあ。」

「まあ、こんな時期にここに入ってくる人なんていないだろ。」

いるのは、十代みたいなトラブル体質だけだ。

しかし、そういう時に限ってだれかいるのはお約束なわけで……

「佐藤先生……?」

そこには、教師を辞めた佐藤浩二先生の姿があった。

俺と同じ苗字だから、見分けがつきにくい。辰哉がいれば、苗字で呼んでも名前でも呼んでも最低二人は振り向くという、めんどくさい

状況になる。

そんな無駄話を考えていると、先生の方がこちらに気付いたようで、藪を掻き分けながらこっちへ来た。

「君は、達也君だね？こんなところで何をしているんだい？」

先生が、俺がこの学校に来て時間が経ってないにも関わらず、気さくに話しかけてくるのは、俺が後々の事を考えて、よく話したからだ。SALを一人では突破できないからといって、ついていけないわけにはいかない。

「えっと……ちょっと風に当たりたくて……」

我ながら酷い言い訳だ。

「そうですか。では、お互いやることもないでしょうし、デュエルでもしませんか？」

コブラの命令か？ 佐藤先生と一番仲が良くなった生徒（笑）のデュエルエナジーも吸収しようとは、けしからん先生だな。

まあ、受けるけどね。他の人のデュエルエナジーを吸収する量を減らすためにも。

「わかりました。やりましょう。」

俺がデュエルすることで、十代とのデュエルに影響がでるかもしれないが……大丈夫だな。

「決闘!!!」

「まずは、俺の先攻です。ドロー。」

シンクロとエクシーズが使えないため、この世界では俺の使えるデッキは限られる。もちろん、闇のデュエルの時は別だが。

「俺は、リチュア・アビスを召喚。効果により、デッキからシャドウ・リチュアを手札に加える。」

「さらに、手札からシャドウ・リチュアを捨て、デッキからリチュアの儀水鏡を手札に加えてからターンエンド。」

この人のデッキなら、セットカードは無くてもいいだろう。

「私のターン。ドロー。」

「私は、スカブ・スカーナイトを召喚。カードを二枚セットして、ターンエンドです。」

スカブ・スカーナイト

レベル4 攻撃力0 / 守備力0

来やがった……。レイの恋する乙女、ディフェンス・メイデン、キユーピッド・キス全てを内臓するアニメオリジナルカード。ライフポイントが4000だから多用はできないものの、強いことにかわりはない。

達也

4000 手札六枚

リチュア・アビス セットカード無し

佐藤先生

4000 手札三枚

スカブ・スカーナイト セットカード二枚

「俺のターン。ドロー。」

「バトルフェイズ！リチュア・アビスでスカブ・スカーナイトに攻撃！」

「その時、セットされていた畏発動。スピリットバリア。モンスターがいる時の戦闘ダメージは0になります。」

一番面倒なカードを発動されたっ！スカブ・スカーナイトは戦闘破壊されないため、それを処理しないと戦闘ダメージを与えられない。

「そして、バトルフェイズ終了時にスカブ・スカーナイトの効果が発動し、戦闘を行ったりリチュア・アビスのコントロールを得ます。」

どうぞ。もう、サーチ効果は使用したので。

「俺はカードを一枚セットして、ターンエンド。」

「私のターン。ドロー。」

「私はリチュア・アビスで直接攻撃。さらに、カードを一枚セットしてからターンエンドです。」

リチュア・アビスの攻撃って結構迫力あるよな……。800ダメージとは思えない。

達也

3200 手札六枚

セットカード一枚

佐藤先生

4000 手札三枚

スカブ・スカーナイト リチュア・アビス      スピリットバリア  
セットカード二枚

「俺のターン。ドロ。」

とりあえずはスピリットバリアを破壊しなければいけないが……。最高の引きだ。

「俺は、手札から魔法発動。大嵐。全ての魔法・罠は破壊される！」

俺のセットカードはブラフの、リチュアの儀水鏡。破壊されても回収できる。

「甘いですね。罠カード発動、宮廷のしきたり。このカードが存在する限り、このカード以外の永続罠カードは破壊されなくなります。そのため、スピリットバリアは破壊されません。」

マジかよ……。これはまずい。

「俺は、ターンエンド。」

「私のターンです。ドロー。」

このターンもダメージを受けるが、まだ微々たるダメージだ。

「私は、ダイヤモンドマンを召喚。バトルフェイズ。ダイヤモンドマンとリチュア・アビスで直接攻撃！」

「ぐっ……！」

「私はターンエンド。」

達也

1600 手札六枚

フィールド無し

佐藤先生

4000 手札三枚

スカブ・スカーナイト    リチュア・アビス    デiamondマン    ス  
ピリットバリア

儀式モンスターを引かないんだよなあ……。

「俺のターン。ドロー。」

そう思っていたら、引いちゃった。

「俺は、手札から魔法発動、リチュアの儀水鏡。手札のシャドウ・リチュアをリリースして、イビリチュア・ガストクラーケを守備表示で儀式召喚！」

「レベル6の儀式モンスターを、レベル4のリリースで確保したのですか!？」

「シャドウ・リチュアには、サーチ効果以外にもう一つの効果がある。水属性の儀式召喚を行う時、一枚で賄える!さらに、イビリチュア・ガストクラーケの効果発動。相手の手札二枚を見て、その内一枚をデッキに戻す！」

ブラック・ホール デiamondマン

「俺は、ブラック・ホールを選択して、デッキに戻す。」

「ターンエンドだ。」

ガストクラーケを守備表示にした理由は、攻撃表示だとスカブ・スカーナイトの効果でスカブ・スカーナイトに強制攻撃させられるからだ。

「防戦一方ですね。私のターン、ドロー。」

サイクロンかソウルオーガを引けば勝てる状況で、俺は信じられな

いものを見る。

「達也君。君はこのデッキは、相手のカードのコントロールを得て戦うデッキだから、奪わせなければいい、と思っていますね？」

「しかし、違うんですよ。私は、リチュア・アビスとダイヤモンドマンをリリースして、The despair URANUSを召喚  
！」

## コブラの刺客（後書き）

なんと、デュエルアカデミアの教師もプラネットシリーズを持っていました。何処から持ってきたのか……。

## The despair URANUS

The despair URANUS

レベル8 攻撃力2900/守備力2300

黒い球体のプラネットシリーズだ。まさか、ここにもプラネットシリーズがあるとは思わなかった。まあ、プラネットシリーズが最初にできたのはここだ、とSUNも言っていたが。

「プラネットシリーズというカードです。知っていますか？」

知ってるよ！おそらくプラネットシリーズのせいでここに来たんだしな。

「いえ、知りません。珍しいカードですね。」

俺がプラネットシリーズを持ってない以上、余計なことと言わないほうがいい。

しかも、自我を失っていないようだし。

「……！？それはなんですか！？」

「えっ………？何の事

」

俺のポケットが光りだし、さらに、黒いフィールドが展開された。

間違いなくプラネットシリーズ同士のデュエルでの反応だ。

「あなたもプラネットシリーズを持っているんですね……。」

いや、俺は持っていないはず。なら、あの羽の力か？

ポケットを確認すると、案の定マアトの羽が光っていた。

羽が反応することは、誰も知らないはず。SUNでさえそんなことは言っていないかった。これは、隠し通すべきだろう。

「ええ、俺も本当はプラネットシリーズを持っています。ただ、先生と奪い合つのが嫌だっただけで……（何で、俺こんなに先生に媚売ってるんだろ？）。だから、俺がプラネットシリーズを持っていることは、誰にも言わないでくれませんか？」

ちやっかり口止めをしておく。コブラに知られたら最悪だ。

「……わかりました。君の頼みならいいでしょう。誰にも言いません。」

その言い方だと、最初は言うつもりだったように聞こえるぞ。

「では、デュエルを続けましょうか。」

やばっ、デュエルのこと完全に忘れてた！

「URANUSは、自分フィールド上の表側の魔法・罫の枚数×300ポイント攻撃力がアップします。」

先生のフィールドには、スピリットバリアがある。よって、URANUSの攻撃力は3200だ。

「強いですね……。」

「では、スカブ・スカーナイトでガストクラーケに攻撃！」

また、奪われたか……。

「そして、スカブ・スカーナイトの効果により、ガストクラーケのコントロールを奪ってターンエンドです。」

達也

1600 手札四枚

フィールド無し

佐藤先生

4000 手札二枚

スカブ・スカーナイト    URANUS    ガストクラーケ    スピリ  
ツトバリア

「どうしますか？君のターンですよ？」

「俺のターン。ドロー。」

悪いが、俺の勝ちだ。

「URANUSの出番が少ないまま終わりですね。もうちょっと活躍させればよかったのに。」

「何を言っているのですか？」

「ライフポイント4000がスタートってやっぱり少なすぎってことですよ。」

「？」

別に、神引きだった訳じゃない。ただ、今の状況のためのカードが最初から手札にあっただけだ。通常は「事故」って言うが……。

「俺は、手札から魔法発動。死者蘇生。墓地からリチュア・アビスを特殊召喚。」

「いまさら攻撃力が低いモンスターを蘇生してどうするつもりです？」

何その死亡フラグの台詞？

「リチュア・アビスの効果を発動。デッキからイビリチュア・ジールギガスを手札に加える。」

「さらに、魔法発動。サルベージ。墓地のシャドウ・リチュア二体を手札に加え、その内一体を墓地に送り、デッキからリチュアの儀式鏡を手札に加える。」

「俺は、さらにリチュア・チェインを召喚し効果発動。デッキの上からカードを三枚確認する。」

ヴィジョン・リチュア   イビリチュア・プシケローネ   神の  
宣告

「そして、その中に儀式魔法・儀式モンスターがいれば一枚手札に加え、他のカードは好きな順番でデッキの一番上に戻す。よって、イビリチュア・プシユケローネを手札に加える。」

俺がやりたかったのは、デッキの一番上の操作だ。

「さらに、リチュアの儀水鏡を発動。シャドウ・リチュアをリリースし、イビリチュア・ジールギガスを儀式召喚！」

「イビリチュア・ジールギガスの効果発動。1000ライフポイント払って、デッキからカードを一枚ドロし、それがリチュアならフィールド上のカード一枚をデッキに戻す。ここでリチュアを引いたら面白いよな？」

また名言言えたぜ！

「どうせ、さっきのカードの効果でデッキの一番上をリチュアにしたのでしょ……？」

そうです、当たり前です。

「ドロしたカードはヴィジョン・リチュア。よって、スピリットバリアをデッキに戻す。」

「これはつまり……！」

そうだよ、ライフぴったりボーナス貰えるんじゃないか？

「リチュア・アビスとイビリチュア・ジールギガスで、スカブ・ス

カーナイトを攻撃！」

ジールギガスの激流とアビスの槍がスカブ・スカーナイトを襲う。

「ぐわあああ……！！！」

……スカブ・スカーナイトをリンチしたから、十代のデュエルに影響するんじゃないか、と本気で思いました。最初はちょっと心配だったのに、今は本気だ。

そうこうしているうちに、URANUSが俺のところに来る。

……お前、プラネットシリーズを持っていないのに何故……

だが、URANUSの言葉を聞き終える前に、俺の体の力が抜けていく。

「まさか……、何で……」

俺は倒れた。

S A L

コブラス side

「やはり、佐藤達也からたくさんのデュエルエネルギーが吸収できたか。強くして良かったようだな。」

デュエル中の動画を見るが、何かおかしい。

「この黒いフィールドはなんだ？フィールド魔法も発動していないのに……」

The despair URANUS (後書き)

ジールギガスとプシュケローネはまだですが……いいですよね？

SALへ(前書き)

辰哉君達の出番が無い……。

SALへ

医務室

達也 side

「……ここは……？」

朦朧とする意識の中目覚めた俺は、周りを見回す。

「起きたんですね、先輩。」

「空野か……。お前、大丈夫なのか？」

「ええ、昨日には。」

少しづつ、記憶が戻ってくる。俺は佐藤先生とデュエルをして、その後倒れたんだったな。ということは、ここは医務室か。カレンダーを見ると……。一日寝ていたらしい。

「俺は、どうしてここに？」

空野に尋ねる。あんな森の中で倒れたんだから、誰も気付かないと思っただが……

「医務室に匿名の電話があって、それで佐藤先輩の居場所がわかったらしいです。それに、今こんなことになってるから、どっかに倒れている人がいないか探すのに躍起になってますし。」

こんなこと……？

「っ！そうだ、十代達が何処にいるかわかるか！？」

「えっ？そういえば、さつき校長室に行く、とか言っていましたけど……。」

つまり、俺が倒れたせいで間にあわなかった、ということか。

「空野……。今、デュエルをした生徒が、次々に倒れていく現象がおこってないか？」

「そうですけど……。なんで知ってるんですか？」

プロフェッサー・コブラのしかけた、デスクロージャー・デュエルにより、アカデミアの生徒のデュエルエナジーが吸収され、それにより生徒が倒れてしまう。それが、今回の話の全容だ。そのせいで異世界に行き、超シリアスな展開になってしまうのだが……。

「じゃ、俺は十代達の所へ行くから！」

「えっ……。！ちょっと待って下さい！」

待てるもんか。

## 校長室

「なんで校長先生がいないんだよ!!!」

「今、大切な出張中なのネ。」

鮫島校長……。あの人、こつちの世界なら絶対解雇だろ。

「なら今すぐデス・デュエルを中止させろよ!!!」

「校長がいないとできないのネ……」

「校長を呼ぶでアール。」

十代、一応相手は先生なんだから敬語使えよ。まあ、俺には関係ないけど。

「えっと……十代？アモンが呼んでるぜ。」

俺の役割じゃないけど……もう、アモン回復してるだろ。俺はこつなつた以上、早くストーリーを進めたいんだ。

「おっ！達也、いたのか！」

「つつか、今来たんだけどな。」

「それより、アモンが呼んでるって？」

ヨハン、今言っただろ。

「ああ、あいつは回復が早いから、万丈目とのデュエルの後でも大丈夫らしいぜ。」

……？あれ、なんかおかしいなと言った気が……。

「わかった。急ごう。」

まあ、いいか。

「ねえ、達也？」

「どうした？明日香。」

「なんで、万丈目君とアモン君がデュエルしてることを知ってるの？」

あゝあ。さっきの変な感覚はこれか。まあ、簡単に言い訳できるけどな。

「さっきここへ来る途中に聞いたんだよ。」

「嘘。だって、生徒は全て集められているもの。生徒に会うはずがないわ。」

あれ、一気にやばくなった？どうしよう。

「空野に聞いたんだよ。」

「じゃあ、空野君に聞いていい？」

だめです。やめて下さい。

「達也。なにか隠してるでしょ。」

この言い方は、俺がデス・デュエルの事を知っているのに何も言わない事を責めている、と受け取っていいな。プラネットシリーズの事はまだ大丈夫そうだ。

「何も隠してないよ。」

「本当？……まあ、いいわ。」

……大丈夫……だよな……？

「アモンは凄い体力だドン。万丈目先輩なんて、まだ昏睡状態なのに……」

万丈目は昏睡だったっけ？原作をよく覚えていないが、申し訳ない限りだ。

「こう見えても体力には自信があるからね。」

お前はどのなるか分かってたからだろ、アモン。

「皆に態々集まってもらったのは、これのことです。」

そういつて右手を掲げる。

「デス・ベルト？」

「パーティーの直前、プロフェッサー・コブラは皆が一斉にデュエルするようにつけしかけてきた。」

あれ、ここから長い話が始まるんだっけ？とばすか。

「そして、皆がデュエルしたら、そのデュエルエネルギーを吸収する量を増やされて、皆のデュエルエネルギーが無くなってしまつて、皆が倒れた。そうだろ、アモン。」

「っ、そうだ。」

ついでに、明日香にも説明しとくか。

「明日香、これが俺の隠していたこと、デス・ベルトの秘密だ。万  
丈目のデュエルの準備も本当は、見ていた。」

「……そうなの？」

「そうだよ。」

「わかったわ……。」

あれ、アモンが何か話したいみたいだ。話中断したしな。

「それで、僕は夜中にプロフェッサー・コブラとオブライエンを見  
かけ、不思議に思ってたんだ。」

それだけの理由でつけるのもどうかと思うがな。まあ、嘘だからい  
いけど。

「そしたら、二人は森の奥の施設に入っていた。」

「森の奥の施設……？」

「ああ、それって、以前アニキがサルとデュエルした時の例の研究  
所の事じゃないかな。SALっていう。」

それしかないな、うん。

「まんまだドン……。」

それはとっても同感だ。やる気あるのか問いただしたい。

「コブラと一緒になら、オブライエンもグル……?」

「オブライエンはコブラの右腕。当然と言えば当然ザウルス。」

「よしっ、そこに行って二人を探し出そう!」

いいのか?ヨハン。あいつらはリアルファイターだぞ?

「「「「「おー!」「」「」「」」

あっ、そうですか。まあ、俺も付いていくけどね。

森

ここは俺の来た場所とはちがうな……。まあ、森の描写はあっても、具体的には何処にあるか分からなかったしな。

「それにしても、深いところまで来たなあ。」

「ああ、そうだな。」

「見えたぜ、あれだ。」

ということとは、ここらへんにセンサーがあるのか。っ？あれじゃないか？めっちゃわかりやすいじゃん！！！！　こんな遠くから見えるし！！！！　色目立ちすぎだろ！！！！　まあ、いいか。俺の突っ込むところじゃない。

じゃあ、入るとしますか。

## マアトの羽の謎

SALコンピュータ室

コブラside

「来たか、フフフ。」

「さあ、入ってこい、遊城十代。」

海馬コーポレーション

辰哉side

俺は、何故かあの後すっごい勢いで昇格して側近っぽくなってる。

そして……何故か、さっきから海馬社長がたくさんの人と電話している。

なんかあったのか？

「　　そうか、わかった……。」

何があったんだよ。

「何かあったんですか？」

「貴様には関係の無いことだ。」

お決まりの台詞だな。そういう場合、いつもその台詞は意味なくなるから止めといたほうがいいぜ。

「俺は嗅ぎまわりますよ。」

「……勝手にしろ。」

折れるの早いなあ。ありがたいけど。

ということ、今、デュエルアカデミアの事を調べてるんだが……

「マジかよ……」

生徒名簿には、あいつの名前が書いてあった。

「佐藤達也……」

でも、見つかったのはいいことだ。これで、俺以外の人もここに来ていることがわかった。そうすれば、探すのにも精が出る。

「じゃあ、行くか！」

達也 side

「あつたか？」

「建物内はあらかた探し回ったけど、何処にもコブラはいなかった  
ドン。」

「十代、こいつは動くようだ。」

なんで皆が集まったところで見つかるんだよ。そこは、一番最初に  
来た所だろ。

「このエレベーターどこに続いているんだろ。」

「この先にコブラがいるザウルス？」

これ、明らかに誘ってるだろ。

「この下から強い電磁波が出ている。」

そんなことはいいから、早く入ろうぜ。

「とにかく入ろうぜ！」

俺が言う前に十代に言われた……

「ちょっと十代？ 罠かもしれないわ。」

「畏だろつがなんだろつが構うもんか！」

構えよ。

「そのとおりだ。ヤツを見つけないければ、話にならない。」

ヨハンが話しながら入っていった。反論は許さないのな。

エレベーターの窓から俺が見たものは……

「広っ！……！」

マジかよ……。なんでこんなに広いんだよ……。アニメで見たら分らないことがあるんだな。

「アニキ！……！」

「動物の実験施設だと聞いていたけれど、こんな風になっていたなんて……」

「やっぱ皆も同じ反応だよな。」

広さを感じながら、エレベーターが止まる。

「great 地下にこんな場所があるとは！」

「この何処かにコブラがいるザウルス。」

それは確定してないだろ。

「ここは、手分けにしよう。」

原作通り、ヨハンが二手に分かれる提案をする。

「俺と十代、翔、達也。剣山と明日香はジムと一緒にたのむ。」

俺は十代側か。原作のデュエル見てみたいけど、俺がいるとデュエルに影響するかもしれないんだよなあ。

「OK」

「丸藤先輩、アニキの事頼んだザウルス。」

「まかしといて！」

最終的に翔は何もしないけどな。



数十分後

「十代は!？」

「アニキがいないっす!」

ヨハンと翔が気付いた様だ。とすると、今あつちは明日香を救出しているな。

それにしても、佐藤先生が死んだのか知りたい。あんなに教育熱心な先生(心の闇、とか厨二病な事言ってるけど)が死ぬのは、心が痛む。

「……………あれ、みんなは?」

ヨハン達がない。もう、探しにいったようだ。

「って、マジで!?!」

やばいじゃん。はぐれたし。

「……………」

困った時の、プラネットシリーズだ! 佐藤先生に勝って、話が中断してから、一回も話していないプラネットシリーズは何処だ?

あれ、おかしくないか? 俺は精霊と話せる。ということは、あつちから話しかけてくるはずだ。あの時の話も終わってないし。

カードファイルを確認する。ちなみに、URANUSはデッキに入っていない。

「……あれ？」

URANUSのカードの様子がおかしい。他のカードとは明らかに違って生気がないようになっている。いや、カードに生気は無いけど、感覚として。

「おい、URANUS。」

呼びかけても反応しない。異常を感じて、あわててマアトの羽を確認するが、マアトの羽には何も異常は無いようだ。何が起きたか考えるが、何も分からない。

「あれ、これ、おかしくないか？」

そう言って、俺が手に取ったのはマアトの羽だ。まるで、URANUSの生気がまるごと抜かれていったような……。まあ、直感だけだ。

とにかく、マアトの羽が原因、または関わっている事は確かだ。もうちょっと様子を見てみるか。

「……というか、探さなきゃな。」

そのまま、搜索を開始する。



v s コブヲ(前書き)

今回、中途半端なところで終わってしまいました。すみません。

vs コブラ

「ここか……」

記憶を頼りに、ここまで歩いて来たが、ざっと30分位たったと思う。

どこまで話が進んでるかが分からないが……

まあ、入るしかない。

「ここは……」

ここは、おそらく、ジム達と十代が合流した場所のはずだ。そして、もつけないということとは……

「急ぐぞー!」

つつか、本気で走らないと、ウォールに阻まれて進めなくなる。

「緊急事態発生！緊急事態発生！」

アナウンスが流れる。マジかよ！と思っていると、俺の前後の壁が閉まりだす。

「やばい！！！」

そう言いながら、走り出す。こんなところで足止めされたら、十代達のデュエルを見れないばかりか、餓死してしまう。だれも探しだせないまま、死ぬなんて最悪だ。それに、ここで死んだら、俺の住んでた世界では行方不明者になって、他の人に迷惑がかかる。

そして、俺はこんなに走れたのか、と思えるほどのスピードで走り

……………

「間に合ええええ！！！」

最後の壁にすべりこんだ。途中、大きい広間があったため、もう十代達は行ったのだろう。

「階段がある……………。つまり、これを登りきれば、十代達が居るのか……………」

「コブラ！」

「フッフ、来たか、遊城十代。」

「即刻、デス・デュエルを中止しろ！」

「デス・デュエル計画は、既に最終段階を迎えている。今更、止めようが止めまいが変わらない。」

「なんだと!？」

十代達が、コブラと喋っている。入るか。

「おい、待てよ。」

「ん？佐藤達也か。貴様も居るとは、好都合だ。」

コブラが体にアーマーをつけている。正直、気持ち悪い。

「貴様も、じゃないさ。お前、十代とデュエルしようとしてるんだろ？だが、十代は連戦だ。お前の欲しているデュエルエナジーは採れないんじゃないか？」

無駄に十代に負担をかける必要は無い。ここは俺がデュエルするべ

きだろっ。

「……そうか、貴様もデス・ベルトを調べていたのか。だが、それでも十分だ!」

俺は元から知ってるぞ。

「それなら……、俺とデュエルしないか?」

「なんだと?」

「こっちの方が安定するだろ?」

俺は、十代程のデュエルエナジーは無いが、空野にあれほどのデュエルエナジーを使わせたんだ、俺も案外あるんだろっ。

「フッフ、面白い。だが、そうならばどうなるか分かってるのか? 貴様もデス・ベルトの事を調べたんだろっ?」

「ああ、知ってるから言ったのさ。俺は大丈夫だからな。」

「何だと!?!」

いや、ハツタリだっけ気付けよ。

「さらに面白い! いいぞ、佐藤達也! デュエルだ!」

ノリ良すぎだろ。ちょっと違うけど。

「では、デュエルに調度いい場所に行こうか。」

ああ、あれか。何故か空に行くというヤツ。意味がわからない。

「うっ！」

突然、立っている場所が浮かび始めた。

そして、それが止まった時……

「高え！……！」

高すぎだろ！ 意味が分からなすぎる……！！

「ここならいいだろう。さあ、始めるぞ！」

「決闘……！」

「まずは、俺のターンだ。ドロー。」

このデッキは……みんな！見て驚け……！！

「俺は、召喚僧サモンプリーストを召喚。さらに効果により、守備表示になる。そして、効果発動。手札の魔法カードを一枚捨て、デッキからレベル4モンスターを一体特殊召喚する。」

俺が捨てたのは、サイクロンだ。

「デッキから、終末の騎士を特殊召喚。効果により、デッキからブラック・マジシャンを墓地に送る。」

「……ブラック・マジシャンだって……」「……」

「ほう、ブラック・マジシャンを持っているとは……」

「達也君、どうしてもってるんすか!？」

「達也! ブラック・マジシャン持つてるなんてすごいぜ! 今度デュエルしよう!」

やっぱり、皆、ブラック・マジシャンに反応したか。まあ、決闘王<sup>デュエルキ</sup>者・武藤遊戯が持っているカードだしな。ちなみに、このブラック・マジシャンは、マハードではない。つつか、それ使って遊戯に知られたら拙いんで。

「俺は、ターンエンドだ。」

ほんとは、エクシーズ召喚したかったけど……しょうがないよな。こんなところでバラすわけにはいかない。

「フツ、私のターンだ。ドロ。」

初手にヴェノム・スネークとヴェノム・スワンプがあるのは覚えてるんだが……

「私は、ヴェノム・スネークを召喚。さらに効果発動。召喚僧サモ

ンプリーストにヴェノムカウンターを一つ乗せる。そして、フィールド魔法、ヴェノム・スワンプを発動。ヴェノムカウンター一つにつき攻撃力が500下がる！そして、攻撃力が0になったモンスターは破壊される。」

だから、どうしたんだよ。

「そして、カードを三枚セットしターンエンド。さらに、エンドフェイズ時にヴェノム以外のモンスターにヴェノムカウンターを一つ乗せる。攻撃力が0になった、召喚僧サモンプリーストは破壊される。」

三枚のセットカード？ 原作では二枚だったが……、やっぱり俺とのデュエルでは違うか。

「達也君のモンスターが……！」

「いや、達也なら勝てる！」

……応援ありがとう……。

達也

4000 手札四枚

終末の騎士

コブラ

4000 手札一枚

ヴェノム・スネーク　ヴェノム・スワンプ　セットカード三枚

「俺のターン。ドロー。」

「俺は終末の騎士をリリースし、ブラック・マジシャン・ガールを召喚！」

弟子を召喚だぜ！

「ブラック・マジシャン・ガールっす！可愛いなあ……………」

「スゲー！！！」

……………翔は相変わらずの反応なんだな。神楽坂の時だけで十分だったと思うんだが。

「さらに、魔法発動。賢者の宝石。ブラック・マジシャン・ガールが存在する時、デッキからブラック・マジシャンを特殊召喚できる  
「！」

「何だと！？」

今度は師匠だ。つつか、賢者の宝石引いたから、さっきブラマジ落とす必要無かった……………

「いくぜ！ブラック・マジシャンで、ヴェノム・スネークを攻撃！」

「甘いぞ！私はダメージレプトルを発動！受けたダメージ以下の攻撃力を持つ、爬虫類モンスターを特殊召喚する！」

やっぱりあったか……。きついな。

「だが、ダメージは受けてもらっぞ！」

「ぐあっ……！」

「しかし、こダメージレプトルによりデッキから毒蛇王ヴェノミンを守備表示で特殊召喚する！」

このタイミングで出すということは……

100%セットカードに蛇神降臨があるな。

ヴェノミンは守備表示だ。自爆特攻してくるのを待つしかない。

「俺はターンエンドだ。」

「何で達也は攻撃しなかったんだ？」

「達也には何か考えがあるんじゃないか？」

「でも、守備力0っすよ？」

まあ……。戦術知っている側としてはね……。

「フツ、攻撃をしなかったのか。賢明だな。だが、エンドフェイズ

時に二体にはヴェノムカウンターが乗る。」

「コブラ！次のお前のターンの前に聞いておくことがある！」

ここで、コブラのエピソードが挟まるのか。

「何だ？」

「お前は何でこんな事をしているんだ！」

長かったんで、整理すると、こんな感じだった。

私は、ある作戦中に、仲間を全て失い、あるカードを手に入れた。そして、そのカード以外の全てを失った私はリックと出会った。リックは私を救ってくれた、私の天使だった。だが、ある時、リックは交通事故により死んでしまった。しかし、このカードはリックを生き返らせることができると言った！それから私はこのカードを復活させるために尽くした。

こんな感じだ。っつか、原作見たから覚えているんだが、流石に本人の話を聞くと、気の毒だな……

「人が生き返るはずが無いんだ！！！！」

「正気に戻れ!!!」

「フツ、だが、なんと言われようと私はこのカードを復活させる!」

その気持ち、分かるような分からないような……

「デュエルを続行するぞ!ドロー!」

コブラのターンだ。

v s コブラ（後書き）

主人公のデッキはブラック・マジシャンです。結構、自重している方だと思いますよ、地縛神とかに比べれば。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4844z/>

---

遊戯王 ~プラネットシリーズと共に~

2012年1月14日06時52分発行